

わたしは、どの木あなたが多は
その枝である。もし人がわたし
につながっており、又わもし、が
その人につながっており、おれば、その人は
実を豊かに結ぶよう、なす。私
から離れて、あなたが多は、何一つ
できな、いからである。ヨハネ十五・五



昭和25年



昭和30年

目次

一、告別式次才 1

一、略歴 4

一、弔辞 6

吉田正八

松浦成見

江崎東洋雄

高橋唯市

一、思ひ出

・ あなたがたはわが証人、わたしが選んだわが僕である 榎本利三郎 11

・ 柔和な人たちはさいわいである 丸橋幸市 16

・ 主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きい 伊規須太郎 18

・ 主の聖徒の死はそのみ前において尊い 高木敏夫 20

・ まづ神の国と神の義とを求めよ 野村末雄 22

・ 彼は死ぬれども信仰によりて今なお語る 志岐成久……………26

・ わたしは平安をあなたがたに残して行く 前田幸江……………30

・ わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い。 伊規須泰子……………33

わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び歌います

・ あわれみ深い人たちはさいわいである 安部タマエ……………35

・ 父の思い出 河本実……………67

一、座談会……………39

一、記念会……………53

一、夫と共に……………83

日時 昭和三十六年二月六日 午後二時

場所 八幡市熊手町二丁目

於 八幡バプテスト教会

河本小太郎告別式次才

司式者	榎本利三郎
司会者	伊規須太郎

一、奏 樂 伊規須 泰子

(遺族入場)

一、讚 美 歌 四八二 會 衆 一 同

一、聖 書 朗 誦 ヨハネ伝五章一―一一 司 會 者

一、祈 禱 麟 司 會 者

一、故 人 略 歷 島 内 清 身

一、讚 美 歌 五二七(故人愛歌) 會 衆 一 同

一、告 別 の 辞 榎 本 牧 師

一、祈 禱 麟 會 衆 一 同

一、讚 美 歌 四八九 會 衆 一 同

一、弔 詞 教會代表 高 木 敏 夫

全 九州山口漬物協議会副会長 吉 田 正 八

全 福岡県漬物協會會長 松 浦 成 見

全 關門北九州漬物佃煮協議會會長 野 村 勇 次

全 教會婦人會代表 島 内 政 代

全 友人總代表 江 崎 東 洋 雄

全 社員代表 高 橋 唯 市

一、告 別
 一、親 挨
 一、祝 禱
 一、頌 榮
 一、弔 電
 全

(献花)

福岡大濠公園教会牧師

下 折 会 野 有
 川 滝 衆 村
 洋 鶴 一 末
 太 治 同 義 志

河本小太郎略歴

故河本小太郎氏は明治二十五年一月六日広島県安芸郡仁の島に於て父河本市五郎母トラ兩名の四男として出生し、少年時代両親に従ひ農事に精勵す。頃は日露戦争、兄ら次々に応召し留守中よく二十名に余る使用人に混じり大人にも負けず家業に専念し、生産の農作物を市場に車で持込むと市に集る仲買人は先を争つて買われたとはその出来ばえが他に比してはるかに優良であつた事は自慢の一つであり、近年日出に於ける生活の樂しみの野菜作りも當時の片鱗であつたと察せられ、その後長兄久次郎氏門司に移住し漬物業を開業するに當りこれを助けんと郷里を出て門司に至る。

その間大正元年軍務に服し満洲警備につき生来の真面目さは模範兵として衆目され、除隊後かつ子夫人と結婚し、大正四年八幡へ進出河本商店の創業を見るに至り営業は日々隆昌に至る。昭和二年八幡商工会議所初代議員に當選爾後三期連続最高点當選歴任す。昭和二年天津に於ける福岡県物産見本市が開催さるゝに當り県代表となる。同五年台湾朝鮮上海方面に對し輸出版売を積極的に初め朝鮮漬物輸出組合組長となる。同年八幡市消防組部長、全八幡市在郷軍人会分會長、八幡漬物組合長各役員を昭和二十年迄歴任。その間更にサクラビール株式会社重役就任。同六年八幡市信用金庫理事就任。同十二年福岡県漬物佃煮統制組合役員。同二十二年八幡冷蔵庫株式会社社長。同二十五年関門北九州漬物佃煮協議會會長。九州山口県漬物協會副會長。福岡県漬物協會副會長。全国漬物協議會副會長等就任す。

昭和七年神の特別の恩寵によりイエスキリストの救を得ひたむきに信仰生活の実践に日夜励む或時、心に示さるゝ物を感じ酒を自ら断つと共に之が及ぼす社会への影響を考え營業の主力であつた酒類販売を急に中止し一途に漬物佃煮の製造に力を注ぐ当時之が關係者は驚きその決意の並々ならぬを知るその後ビール界の不況が起き業界が苦境にいると人々はその所置を先見の目があつたと言われしもそもそも前途の如き事情であつた今日日曜休業の商店も数多い事乍ら二十数年前断固実行せし勇氣決断も又偉なる哉と言わねばならぬ。

商業が一つの趣味の如く東はん西走旅行に暮れる多忙の日が多かつたが半面実によく知人親戚の者の面倒を見、病める者を訪ね悲しめる者の友であり祈りの人であつた。無口であつたが絶えず温情を心に持ち家族社員に対しても非を責め怒るが如き姿を知らなかつた。

今や死もなく悲しみもなき国へ凱旋せらる「すべて主に在りて死ぬる死人は幸なり」の言葉につく。

茲に氏の略歴を読み思出とします。

昭和三十六年二月六日

右文章作成 下川洋太

朗読 島内清身

弔 辞

故河本小太郎 殿

貴方は年若き頃より実業本位に精励され他をしのご事業をなされました。特別御多忙にもかかわらず人間愛と剛腹な責任感に依つて福岡県漬物組合は勿論、全国漬物協会、九州山口漬物協会顧問として現在迄永い間尽力下さいました。

業界のみならず個人的にも益々御壮健にて御指導を常日頃御願ひ致して居りましたけれども如何せん病魔に襲われ御家族の手厚き御看護の甲斐なく不帰の客となされました。

人間一度は空に帰るとは言いながら大兄たるべき方を無くし転断腸の思いが致します。

爾後生前の御指導を旨として愈々業界の発展を誓います故 御霊安らかに御昇天下さい。

昭和三十六年二月六日

九州山口漬物協会副会長 吉 田 正 八

弔 辞

本日茲に故河本小太郎氏の告別の式に当り組合を代表して一言御挨拶を申し上げます。

同氏は明治二十五年広島に生れ大正四年漬物業界に入るやその後八幡市商工会議所会議員、八幡市信用金庫理事、八幡冷蔵社長、全国漬物協議会副会長等幾多の要職を歴任され人格高邁、遠大なる識見、寛容なる指導力等超人間的の偉大さを以つて我々業界の先導となられ未熟なる我々に進むべき道を示され導かれましたことは今茲に贅言を要せない所でありましてその功績の大なることその譬えるものがない程であります。

然るに今や幽明境を異にして相見ること出来なくなりました転た痛恨に堪えません。同氏なき後は日頃御示しになつた御訓しを遵守し、のこされた業界のため我々は能う限りの微力を致したいと念願して居ります。

故人の遺徳を偲びつゝ御冥福を祈り弔辞と致します。

昭和三十六年二月六日

福岡県漬物協会会長 松 浦 成 見

甲 辞

私は本日茲に河本氏告別式の席に臨みありし日の面影を忍び万感交々胸に迫るものを覚えます。河本さんと私の交友は二十有年に及び今はもう幽瞑界を異にして思い出ばかりを偲ぶ私となつてしまいました。数々の思い出の中に特に貴殿について忘れる事の出来ない事を思い出して再び得難き友を失つた事をなげき河本さんを追悼するよすがとしたいと存じます。

友人としての河本さん、一事業家としての河本さん、又クリスチャンとして信仰の厚かつた貴殿に對しては私一人のみならず友人こそつて敬服致して居りました。然しそのような我等の友河本さんは今や逝き呼べど答えてくれません。さけんでも応答してくれません。貴殿との生前の思い出が涙を誘うばかりです。人間としての河本さん貴殿は実に完成された温厚高潔な人格者でした。人一倍の信仰の念に依るものか人に接するに何時も貴殿の、あの巨大なからだと貴殿独特の慈愛に満ちた顔が臉に浮んできます。然し其の内面にはいつも火のような事業に對する情熱を燃やして居られました。時折福岡漬物組合や佃煮組合の会合にて二日市温泉天拝荘にての宴会の折など少しの酒も呑まない貴殿が宴酣の頃にはこれまた円熟の境に達したかくし芸をあの大きな身体で上手な身振り手振り良ろしく、ユーモラスにおどり一同の喝采を浴びた事など今にして思えば唯々涙の種にて胸をさされるような思いが致します。もう貴殿は天国に召され我々の目にあの大きな身体もさびのありる声も聞く事が出来ません。思い出は走馬灯のように次から次に、一つ一つ申上ぐれば限りがあり

ませんが、今一度あのさびた声を、大きなすがたを我等の前に見せてくれとさけばずには居られませんが。

一面又たくましい活動力をもたれた父君を失われた御家族の動転茫失の思いは如何ばかりであろうかと存じ共々涙を流す者ですが、然しあなたの半身として貴殿の最後迄良く看病され内助の功を惜しまれなかつた奥様や立派に成長された御令息が貴殿の生前に劣らぬ河本家又河本商店としての御隆盛を期して居られます。私達もまた微力乍ら影になり日なたになり、河本家の御繁栄を今貴殿の靈前に誓いまして貴殿の眠りの安らかならん事を願います。こゝにこうして告別の言葉を述べ乍らも、貴殿の永遠の眠りの表情があまりに平和で貴殿の他界を信ずる気持ちになれません。あゝ然し貴殿は最早呼べどさけべど何も答えてくれません。どうか安らかに御昇天下さい。心から御祈りし御別れと致します。

昭和三十六年二月六日

友人代表 江崎 東洋雄

弔

辞

去る二月四日零時故社長には六拾九年のこの世の業を終えられまして全く眠るが如くに主のみ許に凱旋なさいました。御病床に就かれましてから社員一同は朝夕ひたすら御平癒再起なさつて下さいますよう神かけて御禱り申上げて参りましたが神の聖旨により平安裡に御昇天なさいました。

願りみますれば私事入社以来四拾余年本主に産の親より育ての親と申す言葉の通り、温情に育まれて幾多苦難の中にも懇ろに御指導下さいまして今日まで大過なく務めさせて頂きました事、本主に社長の仁徳の致す所でありまして唯々感謝に堪えない次才であります。

今後は残されました私共社員一同は社長の御教訓を肝に銘じ粉骨碎身御遺志を継承致しまして社運の隆昌に邁進いたす覚悟で御座いますすれば何卒靈の御被護たれ賜わん事を切望してやまないもので御座います。

一言辞を述べて弔辞と致します。

昭和三十六年二月六日

河本商店社員代表 高橋 唯市

思　　ひ　　出

あなたがたはわが証人、わたしが選んだわが僕である。(イザヤ43 10)

主の奇しいお導きにより河本さんとお交りに入れて頂き、殊に昭和十四年秋に入幡へ参りました以来、側近くに在つて共に主にお従いして参りました。数々の思い出が今も活き活きと働いて居ります。

多くの人々(実に無限に数多い人々)の中から此の眞実な活ける神に選ばれた事、そして此の神の証人として召されて居る事に感謝し、感激して居られました。此の感激が生涯主にお従いする原動力と成つたのではないでしようか。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。(ヘブル11 6)

河本さんは人生経験豊かな方で、事業の面でも實際的经验を通して素晴らしい知恵を持つて居られました。普通でしたら「他人が何と云うても私はそうはいかん、私の経験からは……」と素直に信じ従う事が出来ません。然し河本さんは神の言葉として、聖書の御言葉には実に単純素直に理屈抜きに、幼児のように信じ従つて居られました。軍隊生活の体験を通して上官の命令にさえ無条件に従つて居るのだから、主の主、神の神である父なる神様には無条件で素直に従うのは当然な

事であると悟つて居られました。それも幼児が母の懐に信頼する様に喜びを以つて御言葉に信頼されて居りました。神癒の信仰も御言を与えられると単純に、然も堅く御言葉に立つて「御言葉通りに主が成して下さつたから、もう大丈夫です。」と状態がどんなでも安心して立ち上つて御言葉に従つて居られました。

安息日を守つてこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられたようにせよ、六日のあいだ働いて、あなたのすべてのわざをしなければならぬ。(申命記5・12-13)

今日では週休二日が定着しようとして居ります。盆と正月以外には休む事を知らなかつた当時の事業家の河本さんが、神様に対して悔い改めてイエス様を信じて直面したのは安息日の問題でした。勿論その当時も銀行、会社、学校は日曜日は休みでした。然し一般の事業家が六日働いて日曜日休む事は考えられない程大変な事でした。河本さんはエス様を信じて、安息日の意味、日曜礼拝の意味を知ると直ちに日曜日は休業して、従業員も全員礼拝に出席させられました。当時中央町で食料品店をして居られました。日曜日は売上の最も多い日で、お客の多い日ですから「お客様が不自由するから日曜日は店を開けましょう。」とかえつて従業員の方から反対意見が出された程でした。「人に従はんよりは神に従うべきなり。」「まづ神の国と神の義とを求めよ。」結果がどうであつても、状態がどうであつても神様にはお従いすべきであると、それ以来今日まで聖日を守られて来ました。「人は六日間働いて一日休む様に神様が造つて下さつたのだから、聖日を守る事が心身の健康のもとです。」とよく証して居られました。

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿つてゐる聖靈の宮であつて、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは代価を払つて買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもつて、神の栄光をあらわしなさい。

(コリントオ二六・一九―二〇)

長年「自分の身体は自分のものだ、どんな事をしても勝手だ」と考えて、自分中心な自己本位な生活をして来た私共の罪を贖うため神の独り子が十字架にかゝつて、肉を裂き血を流して死んで下さつた。斯んな大きな代価を払つて父なる神様が罪の中から買いとつて下さつて、今神子として神様に愛され、又聖靈が私のうちに宿つて下さつてゐる。尊い聖靈の宮とされた身分である事を自覚なさつた時「自分の身体はもう自分のものでは無い、自分勝手な生活をしては神様に申訳が無い。聖靈の宮にふさわしく大切にしなければ、」と生活の全部を神様に喜ばれる様にと誠実に改革をなさいました。それまでタバコを喫つて居られたが、「聖靈の宮をニコチンで煤べては申訳が無い。」と直ちにやめられました。タバコを喫つた経験者の話をきくとタバコはなかなか止められないとの事ですが、主の御愛に感じ潔くやめられました。又晩酌を楽しんで居られたとの事ですが「聖靈の宮をアルコール浸しにしては申訳がない。」と此れも主の前に決断して、即座にやめられました。事業家が禁酒で通す事は日本の社会ではとても不可能と云われる程困難な事でしょう。然し主が喜

び給わない事は絶対に出来ないとすつかりやめられました。当時酒類の卸問屋をされて、大きな収益があつたとの事です。自分が呑んで良くないものを他人に売る事も主の前に良くない。と酒類の取扱をやめ、此の方面の事業を縮小されました。当時サクラビールの重役であつたが、此も辞めてその退職記念にオルガンをもらつて教会に献げられました。一方漬物製造卸売の方に事業を拡張されました。後に戦時態勢で塩がきびしく統制された時も此の時の実績が事業を継続する事が出来る土台となりました。

絶えず祈りなさい。(テサロニケオ一五・一七)

全幅に主に信頼して居られたので又祈りの人でもありません。私が八幡へ参ります時、河本さんは「先生どうか八幡へいらつしやつて八幡の魂のために祈つて下さい。」と言われました。此の一言は私にとつても大変嬉しい音づれでした。「一人の魂が救われるのは人間の業では無く神様の業である。」との意味を表わして居ります。それに祈りの能力と云いますが、信仰もつて祈る祈りに応えて働き給う神の能力の素晴らしさを知つた人でないと言えない言葉です。

河本さんが総檜の二階建の家を新築された時、祈りの部屋を造られました。そこで一日一日のために祈り主との交りの時を持たれた事と思ひます。

無口な河本さんは礼拝にも定刻前に必ず席に着いて祈つて居られました。金曜日頃「今から東京へ行つて参りますのでお祈り下さい。」と挨拶されますので、「今度は東京で礼拝を守られるかな、」

と思つて居りますと、日曜日にはいつもと変らないで、前から二番目のベンチ、いつも座る席にいつもの様に座つて居られました。平凡な事の様ですが此れがなかなか出来ない事です。又肩幅の広いあの巨体がドツシリとベンチに座つて居るのを見ただけで気持が落着き、安心すると皆様が証して居られます。時折説教の前頃、後部席を見廻して、多勢の出席者を見てニコツと嬉しそうにして居られました。多くの魂が救われ、恵まれる様に祈つて居る人の喜びだと思ひます。

河本さんは身体も大きい心も寛容で従業員の方々から「大将から怒られた事が無い」とよく云われて居りました。

子供好きで俊雄、和義、咲子、誠と四人共ずいぶん可愛がつて頂きました。当時信生さん、高橋の京ちゃん、秀ちゃん、悦ちゃん、善子ちゃん、木屋さん・・・と日曜学校の後の席で河本さんがいつもニコニコ眼を細くして見守つて居られました。

河本さんの信仰生活を支え、病床に在る河本さんの看護に全力を注いで尽された奥様が今は河本さんの信仰を受け継いで更に信生さん一家へバトンタッチされて居る事は神様の何より大きな御祝福だと思ひます。

柔和な人たちはさいわいである。

(マタイ五―五)

私は昭和二二年九月一四日始めて上月藤子さんに連れられて、教会に来て見ました。其時は何も分りませんので、キリスト教はどんな事を云うか、行つて見ようと思つて来て見ました。すると若い人達ばかりで老人は見当りませんでした。只一人、一番前の席に白髪のお年寄りの方が見えまして、それが河本さんであると後で知りました。其時はどこの小父さんかなあと思つて見ました。さて私はどこに坐ろうかと考えました。話を聞くなら前の方が良かろうと、前から三、四番目位の所に坐りました。それから二、三ヶ月して私の宅で家庭集会をして頂きました。家は戦災住宅で、雪が降り込むような家でした。其時河本さん御夫婦が来られて、色々とお証を聞かせて下さいました。私は戦災に遭い、家の中には何一つ無く、嬉しいやら恥ずかしいやらでした。本当に神様は有難いと思ひました。その夜休んでから河本さんと云う方は私等のような卑しい者にも、へだてなく足を運んで下さつた事を思つてうれしくて言葉で現わす事が出来ませんでした。翌年の四月一五日洗礼を受ける時も、河本さん御夫妻が来て下さいました。先生は先に水の中に立つて居られ誰も行くとうしませんでした。河本さんが「早く行かねば・・・」と云われましたので、私は一番先に洗礼を受けさせて頂きました。河本さんが「早く行かねば」と云われた一言が今でも忘れる事が出来ません。それから四年経ちまして、私等家を与えられ荒生田町二丁目に移りました。其家で家

庭集会をして頂き其時も河本さん御夫妻に来て頂き、色々とお証して頂きました。河本さんは私の事ならどんな遠方でも足を運んで下さいました。又三、四回お宅を訪ねさせて頂きました時も、気持ち良く優しくイエス様の道を教えて下さいました。河本さんと云う方は、私ばかりでなく皆さんにも、こんな働きをして居られたのではないでしようか。本当に神様の様な方であられたと思います。河本さんはイエス様がお喜びになる道を一筋に進んでおられた方と思います。私等も河本さんの歩まれた道を踏んで行きたいと思えます。

丸 橋 幸 市

主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きい

(ハガイ二・八)

河本さんの在りし日の姿をしのぼうと古いアルバムや記録を繰つて見ました。

- ① 昭和二十九年クリスマス記念写真 於 教会玄関前
- ② 昭和三十四年クリスマス記念写真 於 会堂内
- ③ 告別式次才 昭和三十六年二月六日 於 八幡バプテスト教会
- ④ 納骨堂写真 東 郷

これらをじつと見つめ、読み返していると様々な事が思い起されて来ます。

私をはじめて前田教会に出席したのは昭和二十六年四月はじめのある早夫祈禱会で、その後約十年間、河本さんからどんなにお世話になつたかわかりません。

二度の会堂増築に当つては、建築委員長であられた河本さんの下で会計としてお手伝いさせて頂いた事もありました。

お忙しい河本さんの事として個人的に特別のお交りを頂いた事は少なかつたと思いますが、とにかく集会に欠かさず出席されるので、教会の各集会が何よりの交わりの場でした。

河本さんの入信当時のお証しとか、そのいさぎよい信仰生活など榎本先生のお話の中で繰返し教えられて居ますが、私が直接河本さんにお会いする様になつて最も印象に残るのは次の事です。

① 集会では必ず男子席最前列の左端に着席され、最先にお祈りなさつていた事。「天のお父様、御名と御宝血を崇めて感謝申し上げます……」とのお祈り、ことに早天祈禱会でのお祈りの姿が目に見えかぶようです。

② いつの頃は忘れましたが、新年聖会最後の感謝会で、私達青年が恵まれた証をしていると、河本さんが大きな声でアーメン、アーメンとおつしやつて本当に喜んで居られた事です。

この所に灯台である教会を与えられ、この教会において私共多くの者が救に与かる事が出来たのは神様の恵みとあわれみによる事は勿論ですが、主の尊い御用をなされた河本さんの事はいつまでも忘れる事が出来ません。

黙々としては居られたが、身をもつて信仰の何たるかを示し、はるかに天国の報いを望み見ておられた河本さんの足跡こそ「……彼死ぬれども信仰によりて今なお物言う……」ものではないでしうか。

最後に御遺族の上に主の豊かな慰めをお祈り申し上げます。「……恐るゝ勿れ、我汝を贖えり、我汝の名を呼べり、汝はわがものなり……」(イザヤ四三)

主の聖徒の死はそのみ前において尊い。

(詩一一六一—一五)

我らの愛する河本さんが召天された。

会社の帰りに、安否を気ずかつて立寄つて見る。玄関に「忌中」の貼紙がある。「ああ、河本さんもついに召されたか」と感慨無量の想い。ややして中に入る。高橋さんの案内で河本さんの遺体にお目にかかる。高橋さんお顔のおおいを取つてくださる。

そのお顔のなんと安らかなことか、全く美しい。こんな死顔は見たことがない。平安そのものである。「河本さん」とお呼びすればそのまま目を開けて「アーメン」と答えそうな、さながら「眠るが如き大往生」である。

河本さんは、六十九年の生涯を主によつて戦い勝ち、三十年の信仰の馳場を走りぬき、神様より託せられた使命を果し尽くされ、今やこの地上に別れを告げ、永遠のみ国へ凱戦されたのである。戦い勝つて故郷に帰る勇士のように、喜び勇んで神のみ許に帰られたのである。

今や愛する河本さんは、主イエスの真白い義の衣をまとい、おそれなく父なる神のみ前に立ち、「善かつ忠なる僕」と親しく主より栄の冠をかぶせられていることであろう。そして父なる神のふところにあつて永遠のいこいに入られたことであろう。

「ああ、河本さんは善いところに行かれた。神さまは善にして善を行い給う。」と主を讚美する。

が、その反面、私の心はいい知れぬ淋しさを覚えるのである。

この過ぎこしかた十年をふり返つてみるに、河本さんは、先生を助けて、蔭になり、ひなたとなつて教会の欠けを補い、重荷を負つて、私たちの救いのため愛の労苦をとつてくださったのである。

思えば、河本さんは、私にとつて忘れることのできない恩人なのである。河本さんを通して前田教会が建てられ、この教会を通して驚くべき福音にあずかり、永遠の生命の生涯に入れていただいたのである。「ああ」・・・思えば、尽きないつかしきさで一杯である。その河本さんは今はなき人・・・。

残されたお家族の痛み、悲しみ、淋しさには心からなる同情をする。言葉においてお慰めすることとはできない。ただ、主からの慰めと平安を祈るのみである。そして、今は亡き河本さんの、信仰の足跡をふんで行かれるよう心から願うものである。

「一粒の麦、地に落ちて死なば、多くの果を結ぶべし」河本さんは、前田教会のため「一粒の麦」となつてくださったのである。あとにつづく我々教会員も、河本さんの信仰にならい、「神才」の生涯を全うし、多くの果を結ぶことができるより、心からなる祈りを捧げるものである。

昭和三十六年二月四日 日記より

高 木 敏 夫

「まづ神の国と神の義とを求めよ。然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」 (マタイ七章三三)

「常に喜べ、絶えず祈れ、凡ての事感謝せよ」

(テサロニケ前書五章一六―一八)

敬愛する河本小太郎氏は私が福岡で救はれた昭和七年に救を受けられて、その頃から主に在つてお交りを頂いておりましたが、実に驚くべき神の僕であつた事を、そのご生涯を通して感じたのであります。ここに掲げた聖言は、恐らく河本さんの信仰生活のバックボーンであつたらうと思ひます。大きな事業をなさり、又地位や財産もあられたお方が、あれ丈徹底して神様に従つて生涯を歩まれた事は、誰でも驚異と感激をうけ、又、非常な教をうけ励ましを与えられたものであります。

私もその一人です。確かに事業の上にも、家庭生活にも、個人的にも凡ての問題に於て何よりも先づ神を才一主義にされ徹底的に通して進まれたのであります。だからどんなに困難な時でも戦の時でも、只神に祈り信頼されて、少しも動揺されませんでした。寧ろ喜んで喜んで感謝しておられたのであります。お仕事も非常に大きくやつておられたのですが、酒類の販売は中でも最も良く売られたのですが、神に従うのだから、神の旨でないと感じて、潔ぎよく酒やビールの販売を一切やめられ、ビール会社の重役もやめ、株も処分され、只管、神に従つて事業をされました。戦時中の物

資の統制時代にも祈つて祈つてどこ迄も神才一の道を突き進んで、困難な中をやりとげられたのであります。だから神は信仰と祈に応えられて、大いなる祝福を豊かに与えられました。私は終戦後二十一年四月から、不思議な神の摂理とお導きによりまして、河本さんのお店にお世話になるようになり働かせて頂きましたが、実に溢るゝばかりの慈愛をもつて、足りない若い私のために祈つて導いて下さいました。よく私は失敗ばかりやつたのですが、大失敗の後にはどんなにお叱りを受けるとかと思つていましたら、その時「神に祈れば失敗はない祈らぬから失敗や、過失が起るのだから、祈れば神様が必ず助けて下さるから、之からもつと祈るうではないかね。」と言われて、却つて大変に励まして下さつたのです。

従業員の失敗なども叱言を言われたもうそのすぐ後では、全く何事もなかつたかの様にいつもと変わりなくニコニコ喜んでおられました。一切の物言にすこしもこだわらず、一切を神様にゆだねておられました。そもそも昭和八年頃、八幡で製鉄の高見官舎の城さんのお宅で、福岡から折滝先生が毎月一回来られて、家庭集會が開かれて大変恵まれました。然し月一回の集會ではどうも足りないと思つたので、ついで多くの人々にも福音を伝えたいと思ひ、河本さんの自宅を開放し二階の二間を集會所として、伝道所が開かれました。之が八幡長者町伝道館であり、現在、八幡前田教会の前身としてスタートしたのです。この様に神才一、教会の礼拝を守ることを切に願つて祈られたのであります。

昭和十四年十一月に、現在の榎本先生が、専任牧師となられて、多くの人々が集り救はれるよう

になりましたが、昭和二十年の八月の八幡空襲に由り、全く焼かれてしまいました。

而し終戦と同時に又、自分の家が出来ますと、すぐ又お座敷で礼拝が守られ、いよいよ神を崇め
てみ栄を拜する事ができました。

こうした中でも尚、神様の新しい会堂を建て、どんな人でも心配なく近づけられるように教会堂
を造る事が念願でありましたから、材料のない時とは言え、ひたすら神様に祈っておられました
遂に念願がかなつて、新しい教会堂の建設が神様の手によつて実現しました。新しい会堂が献げら
れて私共は、心置きなく各集会に出席出来るようになったのであります。実に神様のご愛に感じて
なされた貴い献物で、私共いかばかり恵をうけ、力をうけた事でありましょう。

この神様才一の貴いご生涯のご奉仕は、実に後に続く者をして非常に励まされたのであります。

二十九年の秋、河本商店従業員慰安旅行で広島に行つた時、宮島に上りました。本当にこんな
時の河本さんは、社長さんでなく幼児の如くに喜んで一同と共に心から楽しみを共にしておられま
した。宮島の紅葉谷で一行二十名余の者が奇麗な景色を見乍ら歩いていました時、突然大きな爆発
音が静かな谷間に透るようになり、河本さんの足もとから起つたのです。当りの静けさとその音が全
く予期しなかつたので一同は、はたと足をとめ、一瞬黙つていたが笑がどつと巻起り、暫しの間は、
静けき山に歓声が止みませんでした。その時の河本さんのにこやかな笑顔が今でも私の臉に、昨日
の事のように思出されます。実に河本さんの磊落な所を知る事が出来ます。少しも物事にこだわらず
快活で悠然としていられました。又或時、汽車で河本さんと二人で東郷に参りました。生憎、列車

は満員で坐る所がなく、仕方なく入口の所でドアの横の板壁によりかゝつて立ち続けました。二人共立つた尽で列車は赤間に来ました。静かに目を閉ぢていられた河本さんがフト「野村さん、ここはどこかね？」と聞かれますので「もう赤間ですよ」と返事をしたら「もうトンネル（海老津の）はすぎたのかね知らなかつた！」と言われて全くのんびりとして立つた尽、よりかゝり乍らねむつておられたのです。トンネル通過の音さえも気づかぬ程余裕あるのには全く驚きました。私の方は目を皿にして、駅名ばかり気にして居るのに、これ位一切を神にまかせていて余裕しやくしやくたる、又少しの屈託もなく大きな心の持主でいられた事をしみじみ思います。

又それ丈の広い大きな心の方でいて、非常に細い所まで氣のつくお方で、私が教会の会計をその頃させて頂いていましたが、「教会の会計状況はどんなかね」とよく尋ねられて何かと教会のために、常に心を配られていました。

実に偉大なる前田教会の柱であつた事は、昇天された後、今更の如く強く感じさせられるのであります。思出は沢山ありますが、先の聖言を誠に不言実行されていて、信仰の善き証人として全うされた足跡は、如何に私共を励まして下さる事かわかりません。入信からご昇天までの一切が、私共に沢山な事を語り教えて下さいます。「彼死ぬれども今尙物いえり」全くその通りであります。私も亦、河本さんの信仰のあとを継いで走りたいと願いつゝ思出を終ります。

（昭和四十三年四月三十日）

彼は死ぬれども信仰によりて今なお語る。ヘブル11・4

(一) ほめ頌へつつその大庭にいれ。詩100・4

残暑漸く去りコスモスの花咲くのも程遠くない秋の一日、それは昭和二九年の秋の正午下りだった。当時入信して日浅い私は前田教会を訪れた。初対面の牧師さん、どんな先生だろうと教会へ近づきにつれて緊張する自分を意識した。にこにこ柔らかな顔、反射的に緊張感が消え失せて行くのを覚えた。幼児を抱いて林檎の皮をむく人、穏かな口調、そこには初対面乍ら何の抵抗も感じなかつた。安堵した心は牧師先生と落着いてお話が出来た。何となく魅力的な先生、この教会で十字架の奥義が掴めるぞと希望とよろこびとが帰りの足どりを軽くした。

当時、高木先生、伊規須先生、東先生（伊規須夫人のお兄様）は当教会の三羽鳥としてその存在が他教会に知れ亘っていた。まだ元氣旺盛にして意気もゆる青年信徒だった。よく教会の御奉仕をなさっていた様に見聞している。礼拝の出席者は多く祈る人後を絶たずお説教は他教会からきた私にとつては特に素晴らしいものだつた。さらに驚歎したのは聖霊会堂に満ち溢れた新年聖会であつた。講壇には墨痕鮮かなる年頭の聖句三つが掲示され側には松竹梅の美を極めたお花、靈の乳飲兒にさへも神の御臨在が啓示され、主の聖名を讚美したものだ。聖会は元旦、二日、三日と連日ですの上毎日午前十時、午後二時、七時の三回、計九回の集会がもたれた。各集会はエホバを讚美する兄弟の歓ばしい感謝の声に充された。主の祝福し給う祈りの群であつた。

(二) 人新に生れずば神の国を見ること能はず。ヨハネ三・三

その様の中に在つて靈の乳飲兒はどんな信仰の旅路を続けて行つたか。前田教会のお説教は面白くて眠たくないぞ、この前はとても面白いお話があつた。今日はどうだろうかと云つた調子で喜び又期待したものである。単なる修養訓話の類と同一視してゐるのである。今日の礼拝説教の聖言で主は何を語り給うたか。くりかえし読んでみるが何ら示されないのである。礼拝出席のよろこびもその場限り、主のお恵みなど全くなく単なる習慣的礼拝が続いた。やがて礼拝出席に重荷を感じる様になり信仰の喜びなど及ぶべくもなかつた。それ信仰は望む所を確信し見ぬ物を眞実とするなり。へブル11の1の信仰がなかつたのである。単に聖書知識習得の範圍に止まり信仰を以つて聖言を受け入れなかつたのである。主の聖日には教会でアーメンを唱へ帰れば亡父の法事とてナムアミダを口にするコーモリ信者だつた。神を知りつゝも尙これを神として崇めず感謝せずその念は虚しくその愚なる心は暗くなれり。ロマ1・21 今から考えると全く恥かしくエホバよわが不義を許し砕けたる悔いし心を与え給へと祈らずにおれない。又牧会に総てを献げておられる牧師先生に申訳けない気持で一杯だ。そんな時、お説教の中でたまたま故河本小太郎兄の信仰に接した。御健在当時はよく着物姿で前の席に礼拝の位置を占められた。立派な老紳士で信仰の斗士として貫録十二分の印象を受けたものだ。兄の十字架の信仰はお説教を通してはつきりと礼拝出席の兄妹の魂の中にその映像が焼付けられたのである。これは今なお当教会の信仰にもゆる炎となつて生き続けている。

心は濯がれて良心の咎を去り身は清き水にて洗はれ眞の心と全き信仰とを以て主の聖前にのぞむ祈

りの群の中にそれは今も生きてゐる。アベルは死ぬれども信仰によりて今をほ語る。の聖言を嘗ひつゝ兄の信仰を回顧してみたい。

(三) 見ゆる所によらず信仰によりて歩めばなり。 コリント後5・7

故河本小太郎兄は救はれる前は酒類販売業を営んで居られた。入信して、人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既にすぎ去り視よ新しくなりたり。コリント後5・17の聖言によつて新生なされた兄は神の聖手になるところの尊い人間(エペソ2・10)が酒にふける者となり身を滅して行く有様に氣をとめられた。酒類販売を生業とすることは主の御旨に反するものとぞ、決然と転業を決められたのである。当時この問題に就いて日夜祈りが捧げられた事は察するに余りあるものがあつたらう。転業これは当事者にとつては、生涯の一大事である。そう簡単に易々として出来るものではない。その困難なことは容易に想像がつく。個人の転職さえも決断するまではあれこれと心勞して仲々決着し難いものである。まして従業員を含めた大世帯ともなれば推して知るべしである。取扱商品は変り仕事の内容勝手もすつかり違うのである。すべてを主の聖手に委ねられて(ペテロ前5・7)現在の漬物販売業へと神の導きに従つてこられたのである。エホバは兄の信仰を悦ばれ新しい事業は主の祝福のうちに繁榮してきたのである。信仰なくしては神に悦ばれること能はず、そは神に来る者は神の存すことと神の己を求むる者に報い給ふことを必ず信すべければなり。へブル11の6 晩年の河本小太郎兄は後に残る兄弟のために次の聖言を通して祈つて居ら

れた事と信ずるのである。エホバに感謝せよ、エホバは恩恵ふかくその憐憫とこしへに絶ゆることなし。詩¹¹⁸ 11・1 信仰の導師また之を全うする者なるイエスを仰ぎ見るべし。ヘブル12・2 故河本小太郎兄の信仰を偲び全地よエホバにむかひい欽ばしき声をあげよ詩¹⁰⁶の1と祈りと讚美を以つて主の聖名を崇め勝利から勝利へと信仰の旅路を続けよう。

志 岐 成 久

わたしは平安をあなたがたに残して行く

(ヨハネ十四ノ二十七)

二十六年頃から教会へ行くようになりました。私は暫くして河本さんを知り、長老さんであられる事を知りました。でつぶり太られた上品なお姿で、見るからに温厚な御人柄の方でした。

何物にも動かされない様な河本様はたゞ一筋に神さまに信頼されてた、と伺つて居ります。

その河本さまに接します時私は袷元を正して接せずには居られない御方でした。

河本さまが中風を病まれて二、三年して大分よくなられ杖をついて教会においでる頃だつたと思います。或る時奥様と三人で讚美歌五二九番を歌いお祈りした事がございます。河本さんは声にはならないようでしたが、最後迄お口を動かしてられたお姿が、今も尙私の脳裏にはつきり残つて居ります。懐かしい想で一杯でございます。山の中の一軒家に住んでます時、河本さまの召される前用事はありませんでした。が何物かに引き寄せられるように、私は山をかけ下りて教会へ行きました。すると河本様の臨終を知りました。私はしばらく驚きで口がきけませんでした。明けの日、再び行つた時はとうとう召天されました。悲しみで胸のいたみを感じました。奥様に何と御挨拶申上げてよろしいか解らないまゝ導かれて遺体と対面致しました。誠に平安な微笑かに笑迄たえて居られるようなお顔を拝し、誠にこの人こそ最も神に愛された御方だつたと思ひました。

出棺前、榎本先生が一般の方に河本さんとの面会は今日限りです。どなたか面会されませんか

おつしやられて、私は飽きずに二度三度と拝顔し、今も尙その時のお姿が目前にちらつきます。後になつて思いました事ですが、河本さまの召天近い事を靈の導きにより知らされ、山の上からかけおりのようにして（集会があつて行つたものではございません）教会へ行くなどなんと不思議な神さまのお導きにあずかつた事かと、たゞもう神さまを崇めずにはいられませんでした。又私如き者も同じ幹につらなる者として、神さまが取り扱つて下さつた事は驚異の外ございません。

戦后物資不足の折でしたと聞きます。河本さまが感謝のささげ物として、建てて下さつた教会で、今日こうして神さまの深い御愛と摂理とを悟り知る事のしあわせを、なんと感謝してよろしいか解りません。詩篇四〇ノ五 わが神主よ、あなたのくすしきみわざと、われらを思ひみおもひとは多くて、くらべうるものはない。わたしはこれを語り述べようとしても多くて教えることはできない。とありますように、河本さまに残して頂いた教会のお蔭で、限らない恵みを頂戴致して居ります。

長女が小学三年生頃でした。或る日、日曜学校で教えられたお話を想い出しこんな事を申した事がございます。お母さん、天国の門はせまいと教えられた。けれども、河本さんの伯父さんが行かれるなら自分のお父さんにも行けない事はないと思う。お父さんも教会へ行く人になつてくれるとよいね、と云つた事がございます。子供の目にもどんなにかよい伯父さまに見えたのだと思います。全くその様に信仰に富んだお方で、河本さまの生涯の一部分しか知りません私でございますが、思ひ出す毎に尊敬の念で一杯でございます。

現在も時折河本さまのお宅に参りますと床にお写真が置いてございます。見る度に生の声がほとば

しり出るのではないかと錯覚を起す事がございます。生前を偲びまして敬意を表し一筆書かして頂
きました。

前 田 幸 江

わが魂は絶えいるばかりに

主の大庭を慕い。わが心とわが身生ける神にむかつて喜び歌います。

(詩八四ノ二)

昭和二六年頃には、毎朝六時から早天祈禱会があつていた。なんとか神様を知りたいと願つていた私はどの集会にも欠かさず出席しようとはげんでいた。その頃教会に行く度に決まつて出席していた人々が、先ず私の求道生活一ページにしろされていった。

河本さんほどの集会にも欠かさず出席されていた。私自身は直接河本さんと深くお話しする機会には恵まれなかつた。私の引つ込み思案の性格がそのチャンスを失したのである。挨拶程度にしか言葉を交したことがない。しかし集会の一部分の様にも決まつた席に存在するゆつたりとした御姿、真先にお祈りなさる独特のお祈り、柔和な顔に接しつづけるうちに、語られる言葉を聞かなくても、神を畏れ敬う人の生活がだんだんと聞かれてくる感じがした。はじめに感じ知り得たその態度が召天なされた三六年二月迄、御変りになることなく、私の目に見つづけられた。

その信頼は召されて後も度々話し伝えられ、残された私共をばげまし慰め力を与えられる。全く活きた信仰を否むことは出来な。

一つの想い出として、河本さんという人

。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながつており、またわた

しがその人とつながつておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたは何一つできないからである。(約一五：五)。

のみ言葉がボンと浮かんでくる。お忙がしい生活であつたのに、集会を大切にしておかず出席なすつていたから、何事にもすぐよりすがつてお祈りなすつていたから、その歩みが神様の前に謙遜だつたから、柔和な暖いお顔をなすつていたから、神様にお従いするのにいさぎよかつたから、…在りし日を想い出す時、その信仰態度がいろいろと浮んでくる……いつかお証しなすつた、このヨハネ福音書のみ言葉が、すつきり河本さんと重なつてしまつたのであろう。

今、河本さんの御姿を想い浮べると共に信仰に導かれた当初からの事もふりかえつてみて、神様の前に真摯に歩まれた聖徒がいかに大きな影響を与えているかと気がつく。

永遠に消えることのない足跡をしのびつつ私も又この生涯を神に従つて走りぬきたいと決心を新にする。

伊規須 泰 子

あわれみ深い人たちはさいわいである。(マタイ五ノ七)

私が教会に参りました時、旦那様は東の一番前のベンチに奥様は西の真中辺りのベンチに掛けていらつしやいました。この御夫婦は五十路を越えられ横縦大きな一対のお雛様の様なお二人とお見受け致しました。

人当りのおやさしいお方でよく集会の度毎によきものを以てあかしめて下さいました様に記憶して居ります。

一人でも多くの人が救われる事を祈つていらつしやいましたそうです。そして私共夫婦が靈肉共に新しくなして下さる様に御祈りして下さいました事と存じます。

榎本先生が口教の少ない河本の御主人とおつしやるそのお方が、電車道を渡つておられますのにわざわざ後返つて、教会の前でこじき同然の私の様な者に神癒の祈りの時先生に祈つてもらいなさいとおつしやつて戴きました。その時私の為天使の様なお方だと思いました。重みのある静かな御声が今も耳に残つて居ります。

御葬儀は場所の都合により黒崎のバプテストで盛大にもでした。後日奥様を御慰問する為、その供えられたお花を戴きに婦人会の人達と一緒に伺い、奥様のお元気なお顔を拝して安心して帰宅した事がありました。

昇天なさいまして七年を迎えなさいましたので、にぶい頭でつゞつて見ました。

父の想い出

土蔵造りと石だたみ、千本格子に白壁の民家……その静かなたゞずまいの倉敷の街に、私は父との古い懐かしい想い出を持っています。

このところ仕事の関係で旅することが多いのですが、そんな旅先の街のどこかでふと父と共におとずれた日の一駒が想い出されて、なんとも云えない気持ちになります。

特に瀬戸内海の美しい街には多く、その殆んどが、戦後事業の再建に明け暮れていた父の鞆持ちとして同行した時のものですが、時には遠く小学生の頃のもあつたりするのです。

日頃は雑事に追われて思い出しもしないのに、そんな時はちよつとした小さな出来事までが記憶の中によみがえつて来て、思わずハツとさせられることもあります。

事業家としての父の行動範囲は、当時としてはかなり広いもので、国内は勿論遠く朝鮮、満洲、台湾から中国大陸の各地にまで及んでいました。旅行好きであつたとは云え、その精力的な活動には全く驚かされます。

今の時代に若し活躍の場が与えられたとしたら、きつと素晴らしい近代的な経営者として事業を展開させていることでしょう。

事業家としての父については、色々と書きとめておきたい事があるように思われますが、それにもまして深く肝に銘じたいのは信仰の人としての父の足跡です。

今日の私にとつて、これ以上に深くかつ鮮やかな感動をおぼえるものはありません。

父の信仰は一口で云うなら単純明快であり、又きわめて実践的であつたと私は思つています。

長い信仰生活のどの場面を想い出してみても正に天真爛漫、どこにも暗い影や難かしい教義を見出すことはできません。

何時も初々しいばかりの信仰が、時として病床の知人を訪ねて祈り、悩み多き人の友となつて主の恵を語らしめたと云えましよう。

牧師先生に対する終始一貫した父の言動も忘れることができません。

「神よりつかわされた器」としての尊厳さを常に真正面から受けとめてはいても、反面一人の最も身近かな敬愛する兄弟としての温かい思いやりを忘れたことはありませんでした。

想い出多い前田教会をはなれて十数年……いくつかの教会で信徒や役員と牧師先生との色々な形の交わりを知るにつけても、父のこの折目ある姿勢には全く感心させられます。

旅先での様々な想い出は、たゞ想い出としての懐しさだけを残してくれまます。私はそれを何時までも大切に仕舞つておきたいと思つています。けれども今、生きている私にとつて新しい力とはそのなつかしさではなくて、父から受け継がねばならない信仰そのものです。そんな風に感じる年になつた、と云うべきでしょうか。

三十年も前の十一月の肌寒い日、私は現役兵として軍隊に入隊すべく父と二人佐賀の町の小さな宿に最後の夜を過しました。その時何を話したのか、今は憶えてはいません。次の日の朝早く郊外の

部隊に行く道すがら、父がくれた私への別れの言葉は父の好きな聖句「神は我らの避所また力なり、悩める時のいと近き助けなり」でした。愈々當門をくぐる直前に私は父の持つていた一枚のハンカチを貰つてポケットにおさめました。

その後、満洲に派遣され、東京の通信学校に行き、關門兵団司令部に赴任するまで、その一枚のハンカチは父から貰つた時のそのまゝの姿で私の所持品の中に大切に仕舞つておりました。

それが私のそばにある……それだけで、私はどれ程なくさめられ、勇気づけられたか知れませんが、ハンカチは一つの想い出ですが、あの聖句は今も私の耳もとでさゝやかれているのです。

この素晴らしい遺産を私は立派に守り抜きたい。今はたとこの一事をひたすらに願つております。

一九七三

河本

実

在りし日をしのんで（座談会）

一九七一年（昭和四六年）の新年は明るく晴れた元旦を迎えて始まりました。しかし、それも束の間で、三日の午後には天候もくずれ、四日になると夕方から雪が降りはじめると云う状態でした。三日間の新年聖会も無事に終えた一月四日、しんしんと雪が降る、亡くなられてからこの二月で十年目を迎える故河本小太郎氏の想い出を伺う為に、小太郎氏夫人のかつさんと、現在の河本商店を経営しておられる信生氏を新築されたかつさんの部屋にたずねて、何十年に亘る数多くの興味深いお話を夜のふけるのも忘れてお聞きしました。

長時間にわたるつきない座談を終えて、お宅を辞したときはすでに夜半を過ぎていました。外はまだ雪が降りつづいていました。上気したほほを冷い風にあてながら、速い昔から帰つてきた人のような戸惑いを寒さに引きしめられて、「時」の滔々たる流れにふれ、軽い興奮を覚えました。私は残念ながら個人的に小太郎氏と接する機会をえませんでした。それは、私が自覚した青年に達した時、氏はすでに他界されておられたからです。勿論、それまで子供ながらに知つてはいましたが、その程度では一個の円熟した人格を全て知り尽くすことはとうていできません。この想い出の中で、信生氏がいみじくも「十年たつて、やつと父の値打がわかつてきた」と語つておられますが、確かにそうであると思います。たとえ、どんなに身近かな人であつても、他の人格なり、人となりの深さを広く正しく把握し理解するのは困難なことです。しかし、人にはわからないその人格を

知り、支え、用い、動かしておられる方が常に居たもうことをこれらの想い出を伺いながら再び感じさせられました。

また、最悪な状態にあつたお父さんの事業を引きついで信生氏がさまざまな苦勞を経て、常に、お父さんの背後にある神様の力を現在、発見されたことは喜びであり、聞いている私も深く感じさせられたしいです。

以下の対談はその時の内容を抄録したものです。

今日は、いろんなことをお聞きしたいのですが、まず、信生さんが現在の仕事を始めるに至つた事情について…………。

実は、大学を卒業する前に就職試験の準備をしていた訳です。夏休みのあとぐらいたつたですね。その頃、父はちよくちよく東京へ来ていました。あれは夏休みが終つて帰京してすぐだつたでしょう。何かで、父が上京した時、「帰つてこい」という話だつたもので、とまどいましたね。私はこの稼業を継ぐ気持は無かつたのですし、「お前の好きなようにしろ」と言うことでしたから、ゼミの林教授や先輩が希望会社に紹介してやろうと言つて下さることもありまして、適当な会社を物色していた訳です。ただ、どうしても「帰つてこい」というのではなく、「帰つてきてくれないか」と言うニュアンスのものでした。父はそれまでお前の好きなようにしていいと言つており、前言を

撤回するようなことはほとんどない人でしたので、一転して自分から帰つて来てくれなど口に出すのはよくよくのことではないかと思ひました。だから、父からそう言われた時には、即座に帰る決心をしましたね。このようなことを父は榎本先生にも話していたようです。のちに先生から聞きましたが、「信生が帰つてくれますから」と言つて、とてもうれしそうに喜んでいましたよ、と言ふことでした。兄がもうこの仕事から手を引くことを父は予測していたのかもしれないですね。けれども、そのころ、父としてはこのまま事業を続けてゆきたいと思つていたのではないでしょうか。

それは、信生さんならやれると見込んでいたのでは……。

いや、そうではないでしょう。私自身この仕事ができるかどうかわかりませんし、自分がわからないものを父がわかるはずもなかつたでしょう。ただ、父の気持が弱くなつていたということは言えると思ひます。

大学へ行くまで、いろいろな相談をする相手はお母さんが主ですね。

ええ、まあそうでした。父にしかられた記憶はありませんし、勉強しろ、あゝしろこうしろと言われたこともない、完全にまかせておいてくれたと言えますかね。だからといつて無責任を放任主

義だつたのではなく、暖かい心遣いをしばしば感じたことがありました。

それでは、子供時代にお父さんと遊んだり、話をしたりと言うことは余り記憶にありませんか。

遊んだ記憶はありませんが、とても気にかけていると言うことは、何かにつけて感じてきました。その頃、父のひととなりについては、漠然としかつかんでいなかつたようです。お互い、話そうにも口は重いし、思っていることも、一種のはにかみというか遠慮から、お互いにぶつけ合うこともなかつたのですが、あれだけ口数の少ない男がですね、どうして、いろんな知人を作り、好意をもたれてやつてこれたかと言うことは不思議に思えます。魅力溢れる人柄だつたことは間違いないのですが。

敵はいなかつたですか。

商売上のライバルはあつたでしょう。こちらは敵と思わなくても、相手にねたむ心があると言うような場合もあつたと思います。

やはり、人に親しまれる人柄だつたようですね。信頼感のある……。

それに、どんなことにもとびこんでいつたようです。

ただ、同じレベルで相手になつてケンカすることはなかつた訳でしょう。

そう、相手のことをそれ程意識しなかつたでしょうね。

信生さんが東京におられる時、お父さんは何度か上京されたでしょうし、そうゆう時には、主にどんな話をなさいましたか。

いや、話はなかつたですね。世間話をするぐらいで、「お前は何か食べたいか」とか、自分では飲みませんが、ビールを飲ませてくれたり、うまい物は食べさせてくれました(笑い)。また、熱海あたりに泊る時には呼びよせてくれたりしました。

出てこられると楽しかつたでしょう。

そうですね。上京する毎に、下宿の友人も一緒に呼び出して箱根に遊んだり、歌舞伎を観て、ウインドショッピングを楽しんだり、レジャーだとかオフビジネスといったものをすでに自家薬籠

中のものにしていましたよ。まあ、私は色気の多い時期でしたし、父はまあ言う具合で、傍若無人ですから、お祈りは、人が何人居ようと、汽車の中であろうと、レストランであろうと、大声でやるし、これにはちよつと閉口してましたね。(笑い)

ただ、今になつて、奥行の深い父の値打ちというものがわかつてきつつあるような感じですね。その時にはわかりませんでした。信仰の面でも、困っている人があれば、知人であろうが、得意先であろうが聖書を持つていつてあげるし、祈つてあげるし、今でも祈つてもらつた人に会えば、よく話題になります。だから、非常に素直な信仰を通して行つた人だと言うことでしよう。

恥かしいから言わないでおくなんてことはなかつたでしよう。

そう、全くなかつたですね。口数は少いけど核心をついた話をしてました。それに本当にユーモアなるものを知つていた人だと思えます。ポツリと一言、自然な微笑から爆笑までをよく醸し出したものですよ。厳しい信仰生活を守つた人ですが、ギスギスしたところはありませんでした。

高校時代から大学時代にお父さんのそう言う教会生活、信仰と言つたものについて、何か感じましたか。

感じました。

それはどう言うことですか。

反発だとか、ああなりたいと言う理想像としての父ではなく、ただ見上げたものだなあ、という感じですね。卒直に言つて、自分がそうありたいとか、そうしようとは思いませんでした。けれども早天祈禱会には朝早く（六時）から必ず出席する態度といゝますか、神に対するはつきりした姿勢が、今になつてわかりかけてきているようです。その頃は、それが当然のものだと思つてましたし、自分もあの立場になればやるのかなあ、と思つてはいましたが、朝、寒いのに御苦労だなあ、自分はまだ起きなくていゝから幸せだ、というところでもつたくらい、気なものでした。（笑い）

ですから、大学時代、お父さんが上京されて一緒にレストランなどで食事をする時、大きな声でお祈りなされると気恥かしいという気持があつたわけでしょう。

そうですね。そう言う気持の方が先に立つていました。

その気持がさらに進んで、どうしてこんないやなことをするのかしら、と言う……。

いや、そこまでは思いません。やはり、それは小さい時から教会生活を続けてきた、この家庭に育つたと言うこと、これが潜在意識としてあつたからでしょう。こうゆうことは別に悪いことではないのですから。ただ、そんなに目立つほどすることはないだろうに、とは思っていました。(笑)

卒業後、家に帰つてこられてからはどうでしたか。

家業を継いでからは、信仰の問題というより、その日一日をどうしてすごすか、ということ一杯でしたね。父が倒れたのが、私が八幡に帰つてきてからすぐでしたから。あれは税務署の調査があつた日で、ひどくいじめられました。別法人にしていた日出漬物屋の問題で主として決済上のことでしたが、こちらの店は兄がやつていましたし、それが途中で店を出しましたから、父には残された後のことがさつぱりわかりませんでした。父は元来聰明な人だったので、人にくらぎられるやら、資金を流用されることなどもあつて、精神的にも健康上も参つていたので、打てば響く鋭さがまつたくなつていたんですね。「わからない」と言うことで、税務署の方は何か隠していると思つたのでしょうか。税務署なんて、基本的には疑いから出発するものでしょう？ 調査官など、自分の年令の半分位いの人なんです。そばで見ていて腹が立つ程ひどいことを言われておりました。調査の初日に、そう言うことで父はずい分心労して、顔つきまで変つていました。次の日の朝倒れました。父が倒れたことを聞いて調査官はあわてふためいてすぐに帰つてしまいましたよ。

それでも大分良くなつておられましたね。

ええ、よくなつてました。

その間、仕事の話などは……。

仕事のことには忘れられなかつたようですが、仕事についての話はしませんでした。自分では仕事のことを頭から離れないようでしたが、昔のことしかわからなくなつていましたね。

何年か前のことを、うわごとのように言つて、あそこはどうだ、ここはどうだと。それもハツキリは言わなかつたようです。私の方は資金ぐりに追われてましたし、父に対する労りの気持が素直に出せない状態でした。

その頃は、もう、がむしやらに……。

それ以外に無かつたですね。今日をどうして過ごすか、の連続でした。多少のゆとりがなければ、作戦も、先の見通しも立ちませんからね。

途中で少し、お兄さんがやつておられた訳ですから、信生さんが事業を受け継がれたのは、お父さんから直接、と言うより幾分間接的に受けついでた訳ですね。

ええ、間接的でしたね。したがって私もどんな状態の中に自分が立たされているのかわかりませんでした。その時は店が最悪の場面だった訳です。私としては、毎日、銀行の貸付係のところに行つて座つてましたね。何時間も。毎日ですよ。(笑) 今にして思えば父は倒れる前で体力も弱つてましたし、あの頃から、多少判断を誤つていた面もあつたと思われます。一つの歯車が狂うと、全部が悪い方に向いますから、父としても、居ても立つてもいられない気持だったのでしよう。東京に私を呼び戻して来た時、すでにそう言う気持だったのではないでしようか。

何かある種の不安のようなものがあつたのでしよう。

そうでしょうね。

その頃、天神荘の負担、日出の問題等、それが重さなつていた訳でしようが、そう言うことについて、お父さんがどう考えていたのかわかりませんね。

その辺がよくわかりませんし、どうも父は自分の失敗を悔んだり人のことを恨みがましく言つたことはなかつたのですが、このあたりから、判断の軌道はずれてきたようです。

お父さんが元気に働いていた頃の人たちは……。

内部的には完全なワン・マンでしたから、その頃の人で経営上の助けになる人は居なかつたのですが、外部的には父が築いた信用と言うものがありましたから、それでやつと続けてきた訳です。このことは痛切に感じてました。あの頃、まだ二〇代の若僧が、ゴソゴソはいまわつていても、誰も信用してくれませんから。商売の面に関して言えば、それまでに蓄積してくれていた信用と言うものだけが支えだつたと言えましょう。もつとも、父の信仰については、幼児のような、自分の父親に対するよりもつと親しい気持で、身近なものとしてエス様エス様と祈つておりました。

そう言うことも最近になつて、わかつてこられたわけですね。

そうです。父も、父が持つていた純粹無垢なものも、もつと大事にしておかねばいけなかつたなあと。一〇年経つて初めてわかるんですから、鈍感なものです。

それはやはり、お父さんと同じ事業をやり、同じ苦勞をした上での共感といつた……。

それもあるでしょう。

お父さんも同じ中を通つたんだなあ、と……。

けれども、父はまだまだ何倍もスケールが大きかつたですから、どう言うことを考えて、どんな計画をたて、どう言う判断でやつてきたのか、それと信仰をどこで結びつけてきたのか、そう言うことを、今になつてみれば、聞いておきたかつたですね。今生きておれば七八才ですが、このくらいで元氣な方も大勢居られます。一週間程前ですか、八十何才かの東大名基督教の斉藤勇さんという方、熱心なクリスチャンだそうですが、「聖書こそこの世の中で一番貴い書物である」とラジオで新約聖書について話しておられました。八十幾つになつても、かくしやくとして、理路整然とした論理の展開ができる訳ですから、父も元氣で居てくれれば、と思います。今からでは推測にすぎませんが、表面は単純にみえた父でも、内面ではずい分戦いもあつただらうし、複雑なものもあつたと思います。人にはあまり言わない人でしたけれども。

現在、お父さんに対する信生さんの評価は如何ですか。

クリスチャンとしての父のことは、今までにお話しした通りです。父は実業人としては、非常にスケールの大きな人であつたと言えるでしょうね。だから、私の人間として生きていく上での当面の目標は父であると思ひますし、人にもそう考へていふと言つていますが、父がどんな人間で、どの程度のことをやつたのか知らない人が多いですから、分つていただけるかどうかでしょう。もう、父の盛んに働いていた時代を知つてゐる人は今七〇才以上の人はばかりです。入信前には酒類も相当数取扱つており、その実績からサツポロビール門司工場の前身サクラビールの常任取締役として、まだ自動車が珍しかつた頃自家用車も持ち、会社から送り迎えの華やかな毎日を送つた時代もあるそうです。今でも北九州業界の長老といつた方々から、父のおもかげを伝えられることがよくあります。キリンビールやサントリーの販売では北九州の草分けだつたのですね。

しかし、間接的に事業を引き受けて、苦勞しながらも、お父さんの信用を感じながらやつてくれたといふことは……。

感謝ですね。またこの道を通らないと父の信仰というものにも考へ至る機会がなかつたでしょうから。そのまま、すんなりと調子のいい事業をもらつていたら、今になつて泡をくらつていたでしよう。まず、信仰、幼児のような信仰、喜んでよろこんで教会に行つていた姿、いつでも思ひ出すのですが、それが、どんなに父の生甲斐だつたことでしょう。信仰に導かれると同時に、きつぱり

とこの世的な栄華を捨て去つた氣つぶのよさ、主に対して自分を偽れない一途さを行動で示して、姿勢を正すより教えてくれたこと、これは大きな、何よりの遺産だと思ひます。それから長い間、誠実にやつて来て、それによつてつちかわれた信用というものが、この仕事を今まで支えてくれたわけで、これも感謝です。

また、どうしても通らなければならぬ険しい厳しい道を残してくれたことも、他にかえられない遺産ではないかと思ひます。

記念会（一九七一）記録

見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに麗しく楽しいことであろう。

それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、アロンのひげに流れ、その衣のえりにまで流れくだるようだ。またヘルモンの露がシオンの山に下るようだ。これは主がかしこに祝福を命じ、とこしえに命を与えられたからである。（詩一三三・一―三）

◇ 榎本牧師あいさつ

記念会とは、ただ本人があつたであつた、こうであつたといふことだけでなく……本人はもう天国に行つて主のみもとにいらつしやるので心配ありませんが、後に残つた私共が、本人が導かれていらつしやつたその足跡を通して神様の恵みとみ業を学ぶこと、そしてもう一つは地上において果し得なかつた本人の願いを今後は私共が果してゆくというのが記念会の意義目的でございます。是非この機会にキリスト教の記念会というものを憶えていただきたい。それで、ある方は自分の主人が地上におる時、伝道しようと願いつつそれを果し得なかつたから、どうか先生、記念聖会を開いて主人の果せなかつた分を果させていたゞきたいと頼まれて、福岡あたりでは記念聖会を開きま

す。

そういう風で、記念会というのはあつた、こうだつたということだけでなしに、もうひとつ召された方が願つていらつしやつたことが何であつたかを知り、そして果し得なかつたことを、後に残つた皆で果して、さらに乗り進んでゆこうというのが記念会でございます。

どうぞ皆さん、この機会に河本さんがこの地上で持つていらつしやつた信仰を学び、歩まれた足跡を知るとともに、河本さんが主の前に願つていたものを成就するために語りたいと思います。

◇ 丸橋 兄

その当時は戦災すぐあとでありましたので家はほとんどなく、広つばに教会の屋根が見えておつたのであります。それで初めて教会に行きました。が、キリスト教には若い人ばかりしか来ないんじゃない、私のような年寄りはおらんやろうと思つたりしました。そして事実若い人が多かつたんです。が、ただ目につきましたのは右側の一番前の腰掛の左はしに白髪のおじいさんが座つておられたのを見かけたので、私は同じ話を聞くなら前の方でと思い、あつかましいようでしたが、そのおじいさんの一つ間をおいて後に座りました。

話を聞いてみますと、非常に話がうまいんで「ははあー自分はずまいこと騙されているんじゃないか」と思いましたが、同じ騙されても、このおじいさんのように自分より偉い人と一緒に騙されるのなら、それもいいじゃないかと思ひ直しました。

当時私はその前田の八幡製鉄所に出ておりましたものですから、前田社宅に来るまでは天神町におりました。天神町にカトリック教会がありました。そこはほとんどが課長とか係長とかいう人ばかりで、こゝも金持ちの人ばかりがまいる所だろう、自分達のような者はとてもまいられないと思つていました。と言うのは、私は戦災に会いまして、そうしてほとんど焼いてしまい、着物といえは一重の服一枚だけ、それも袖の方は焼夷弾で穴があいている。そんな服を着ていたのであります。そして社宅といつても、戦後すぐに建てたものでありますから、天井もなければ囲いもないというオンボロでした。そういう所から、私は娘と二人で参らせていただいておりました。

牧師先生の話がいいもんですから、その次の日曜日とその次の日曜日も行きましたが、もう話を聞くような機会が他にないかと聞きますと、早天祈禱会のことを知りましたので、早天に毎朝出席してだんだん神様のみ言を聞かせていただきました。そうして約二ヶ月ほどしてそのおじいさんというのが河本さんであつたということを知つたのです。河本さんは非常に親切で、いつも早天祈禱会は欠かしたことがなく、冬の早天はまだ暗い時でしたが必ずおいででした。その頃はこんな立派な座布団もなく寒い所に七輪を一つおこして、それを七人か八人位で丸く囲んでしておつたんです。ほいでから私も励まされて毎朝毎朝なんぼ寒くても雨が降ろうが雪が降ろうがいつも参つていたんです。

私はその当時家庭集会を初めてさせていただいていたのですが、その家庭集会に河本さんと夫婦が来ていただいで本当にもつたないと思ひました。何故ならば自分達はもう、昔でいうなら乞食

をやるような、本当に雪が降つたら雪が上から吹き込んで、朝起きて見ると蒲団の上に積んどつたというような家なんですから、本当に乞食小屋みたいな所で、ご夫婦でお証しをしていただき、本当に自分はいれしかつたことを思い出します。

あくる年の四月一八日河内で八人の方と一緒に自分は洗礼を受けさせていただきましたが、その時もやはり河本さんと夫婦も来られ私達にいろいろと教えていただきました。初めに先生が水に入られ、まだ寒かつたので河本さんに「早くいかない」と言われ、自分が一番先に洗礼を受けさせていただきました。河本さんは教会のことならどこへでも来てくださるのだろうと、その時考えました。

普通の人間なら汚ないもの卑しいものはよけて通るものですが、河本さんは隔てなく来てくださつてお世話をしていただきました。人間の心ではこういうことはできるもんじやない、神様と同じ心のような気持だつたらうと思います。

◇ 榎本牧師

いまお証しがありましたように河本さんは前のベンチの左側に腰掛けて礼拝のほど五分前には必ず座つてらした。そして今はしておりませんが、毎朝六時から早天祈禱会を——本当にいまお話しがあつたように集会に見えない日がない。ある時には「先生、これから東京に出張しますから祈つてください」といわれ出かけなさつて、それが金曜日、これはとても日曜日の礼拝は難かし

いから渋谷教会でもお出になるだろうと思つていたら、ちやんと日曜日の朝には席に座つてらした。実に忠実に神様に従つていらつしやつた。そして黙つてニコニコして後を振りむいては皆さんが沢山いらしたことがとてもうれしくてたまらないというような表情をして温顔そのものに喜びをたえていらした姿をいままも思い起します。ことに河本さんは不言実行という、口では何もおつしやらないけれども、黙つてなさる方でした。本当に真実に神様に従つてらした。

◇ 大田 姉

あの、私は直接お言葉をかけたことはございませんけど、いつもほんとに頼れる方だと思ひました。体も大きくていらつしやいましたし、タフな感じでした。河本さんを見ていてなにか見えないうに引張られていくような感じで、ご病氣になられた後もそういつた見えないうに引かれていような感じがしてなりませんでした。一〇年とは早いもので、ついこの前のような気がします。

◇ 榎本 牧師

河本小太郎つて名前は小さいけれども実物は大太郎です。本当にながつしりとした岩のような体格をした方で、私も福岡の聖会の際にどこからかベースの低い声で歌が聞えてくる、どなただろうかとふと見たら大きな体をした方が歌つている。それが河本さんであつたということが、後に八幡に来てから初めて知つたんですけれども、河本さんの底力のある低い声というものは、私たちになつ

かしい暖かみを与える声でした。言葉は少ないけれども一度口を開いて出る言葉というものは、非常に人の心を暖めて丸く包んでくださる方だということを思い起します。

◇ 岩隈姉

今の河本さんのお家で家庭集会のようにして礼拝が持たれている時に出席させていたんだんです。その時は黙つて座つていらつしやるし、こう……真地面を顔をして座っている顔つて恐い感じで、近付きにくい、そんな気持ちでただ遠くから見ていただけでした。

ある時、何の集会か憶えていませんが、何かご馳走が出ていました。夏だつたかも知れません。河本おじさんが余興のようなことをしてその時におじさんつて面白い方だなあと見直しました。ですけれども、あんまりお話をしたことはありません。でも顔が会うと、ニコツとしてなつかしいものを見るような、かわいいものを見るような、そんな目で見てくださつたことをいつも憶えています。

想い出はそれくらいです。ほかのことは先生方がおつしやるように、本当に決つた所に決つた時間にといふのでしようか、集会に行けばその場所におじさんがおられるという感じでした。

おじさんが亡くなつたと聞いてもピンと来ません。河本さんのお宅に行けば、いつでもいらつしやるようなそんな気持です。丁度亡くなられた二月は私の祖母が死んだ月で、うちの行事と重なつて全然行かれず、それでピンとこないでしよう。

おじさんは亡くなつていゝるのではなくて、今も天国で生きておられて、おじさんの目から私たちの所が全部見えていゝると思ひんです。私にとつて亡くなつたといゝることがピンと来ません。いゝつも座つていらつしやる——そんな氣持です。

◇ 今本姉

私はいゝつも思ひんですけど、私たちの本当の才二の父のよゝうな氣がします。といゝるのは河本のおじさまが、本当に聖徒の足もとに置くといゝうよゝうな謙虚なお氣持で、この教会を献げてくださつたことをいゝつも感謝させていたゞいていゝるんです。ことに河本のおじさまが教会を建ててくださったから、私たちが今日、主にある恵みを受けることができたことを憶えて、自分の幸福の時はいゝつも河本のおじさまを思ひ起して感謝するんです。

教会が建つ前にも、戦災に会ひ前のお屋敷で日曜学校の時にも出させていたゞきました。河本のおじさんつて教会を建てゝくださつて、私たちがいまある喜びを与えてくださつたなあ、といゝうのが一番先に頭に浮かんできます。

◇ 榎本牧師

会堂が戦災に会つて焼けてしまひまして、まあこれから五年先か一〇年先にも会堂を与えられたらと祈つていたところが、二年後に河本さんが、ほんの側ばかりのちつぽけなマツチ箱みたいなの

家だけれど御用に用いていただけたらというお言葉と共に、この会堂を主の御用にと献げてくださり、その時の献堂の言葉の中に、この地に純福音が伝えられて、さらにこれがあまねく世界の果てまで広がるようにと祈りと願いをもつて献げますというお言葉があつたのを思い出します。

河本さんが何故それほど真剣になつてこの会堂になんとかしてと願つていらつしやつかというところ、河本さんの言葉の中にあるように、今日純福音が伝えられていないということ、今日の礼拝でちよつと紹介しました「神の人のおもかげ」という本の中に、柘植先生の所に大阪のある牧師さんが、福音教会の天幕伝道に参加しようと思うがどうか、これは純福音の教派ですから、というところで質問を寄せた手紙に対する返事がのつていました。それには、その福音教会の天幕伝道には一切参加なさらんがよろしい、もし伝道するなら路傍でしなさい。こうゆうことをはつきりと示されています。それは何故かといいますと、純福音と称するものは沢山ある、また純福音的に行動することもできる、伝えることもできる、働きも同じように働きをすることもできる、けれども、そこには恵みが流れない。だから決して他のものと一緒になつてはいけません。我々が与えられた使命は何であるか、もう一度はつきりしてほしいという意味のことが示されている。特に外国から、よその教会からお金をもらつて福音が伝えられるのではない。外国からお金をもらつて何の純福音といえるかということが厳しく書かれております。そういうことを通して私共は今与えられている福音がどんなに尊いものであるかということを、私は先日、しみじみ教えられました。ですけれども河本さんはその一番大切なものが何であるかということをもつて受けとめていらつしやつた。

またそれだけにいつも主の前に歩いていらつしやつた。この前も河本さんがお召されになつたとき、あとで江崎さんという非常に親しくしていた大きな漬物屋さんがお証しなさつて、私共と一緒に旅行したとき、カゼを引いたりすると河本さんがさつそく私がお祈りしてあげようといつてこのハゲ頭に手をおいて「恐るるなかれ」と大きな声でお祈りしてください、その時はとつてもありがたいかつたといつていました。またよそに行つて食堂で一緒に食事するとき、必ず声を出して堂々と食前のお祈りをなさつた、これはなかなか真似のできることはありませんよといわれたことがありました。私もそうだと思います。一度広島までご一緒したことがありますが、食堂車の中で二人でさし向いになつたとき、周囲には沢山人がいるので、恥ずかしくてゴソゴソお祈りするんでしようけど、はつきり「イエス様今日は……」と声を出して堂々と神様に感謝してお祈りしてください、つたことを昨日のように思い浮かべます。そうして自分が与えられた福音を大切になさつた方だと思えます。

◇ 広田兄

私がこの教会にお世話になりましたのは昭和二五年でした。それから三五年まで一〇年間お世話になつたのですが、今お証しが沢山ありましたように、親しくお話しする機会がございませんでした。いつも決つた場所に決つた姿勢でゆつたりと腰をかけて礼拝を守つておられました。その頃私は青年会に入つておりましたが年に何回か信徒の総代の形でご挨拶なさつたことがあつたほかは

「今日は」「おはようございます」というくらいであまりかしこまつた話をしたことはありません。あの迫らざるタイプでもつて重きをなした、そんな感じがします。三五年から七年間ばかり転動で東京の方に行つておりまして、八幡に帰つてみますと、河本さんの姿が見えませんが、初めてその時亡くなられたことを知つた次才です。今写真を拝見しまして、ありし日のまゝのお姿でこうしてお目にかかれることを非常になつかしく思います。いまにも語りかけられそうなお姿で、童顔といいますが温顔と申しますか、そのままに出ております。今日のこの記念会に出していただき感謝しております。

◇ 榎 本 牧 師

今、お証しの中になりましたように、河本さんはその表情が非常に幼な子のように柔和な表情でいらした。イエス様が「幼な子のごとくならずば天国に行くこと能わず」とおつしやいましたが、本当に純情な方だと思えます。というのは日曜学校を非常に大切にしておられて、ことに信生さんのお小さい時ですから、日曜学校と一緒に出ておられて讚美歌を一緒に歌い、金言も大きな声でいうと一緒に話も聞き、大変喜んでいらした。あの時の河本さんのお姿を今も思い浮かべます。

何かのお証しの時、小倉からの帰りに電車の中でただ一人、日曜学校の歌を歌つていた。そうしたところ到達附近で乗つていた電車が事故に会つたけれど、幸い守られたということを知つたことがあります。日曜学校の本当に素直な歌をあの立派な実業家が電車の中で口づさんでいる姿という

ものは、もはや天国の姿ではないかしらと私は思う次才です。

◇ 島山 姉

今日は今まで河本さんの信仰の話がありましたので、私は一緒に生活させていたでいて面白かつたことを一つ二つ言います。とても面白いことを言われる方で、私のご飯を炊いてそれがやわらかいんですね「今日はおかゆの親方みたいだね」、硬いご飯を炊くとね「今日にはぎつてまくようなご飯を炊いたね、嫁さんはいかれんぞ」と言われたことがよくありました。それからお風呂から上る時、廊下に腰をかけてじいーつと目をつぶつて何を考えているのかといつもそういうふうに見えるんです。それでその時に一日の仕事を終えて明日の仕事などを考えて計画やら考えているのだからと思うんです。当時はラジオしかなくたので歌劇の女性歌手が歌つておつたとき、河本さんは黙つて目をつぶつていたから仕事のことを考えているのだからと思つて、私もへりを行つたり来たりして仕事をしていたらね「何が悲しいんか？ワアーワアー泣きよら」ちゆうてね、それはソプラノで歌つている時やつたんでね。そんなことを言われたこともありましたが、とても面白いことを言つて、私へりで笑つてました。

とてもものんびりした方で、あまりよくよしたことをいつべんも聞いたことがないです。私は今自分で商売してこぼすようなことばかり言つて、榎本先生やら河本の奥さんに電話してお祈りしてもらつたりして慰められるんですけど、河本のおじいちゃんを知っているかぎりはおぼしていた

のをいつべんも聞いたことがないんです。お祈りして進んでおられたのだろうと思うんです。

◇ 榎本牧師

河本さんの隠れた一面を聞かせていただき大変身近を感じがいたします。河本さんが祈つて進んでおられたことは事実だと思います。非常に祈りの深い方であその二階建を建てたとき、静まる部屋（祈りの部屋）をひと間作つて、そこで朝早く聖書を読み祈つて一日の仕事を始められ、一日の終りにそこで祈つて一日の感謝をしていらつしやつたと思います。ですから今お証しにありましたように愚痴をこぼすということはおそらくなかつたと思います。感謝感謝の連続だつたと思います。そしてもうひとつは身体が大きいように物事にこだわらず大まかを反面こまかいことにも気がつく方でした。お目にかかりお交りしていて教えられました。大きな身体で小さいところによく気がつく方で、そうしておいて人に対してゆつたりとして時間ぎりぎりまでに、いかにも用事のないうような顔をして、実は忙しい方でした。ケチケチなさらない方でした。

◇ 長尾 兄

私は河本さんにお世話になつたのが昭和四年ですから四二年間一緒にいたわけです。その間一度も大きな声で怒るといふことはあんまり聞いたことがありません。朝の早いのは特別で、五時でも三時でも起きて陣頭に立つて指揮をし、私らを励まして指導してくれました。今、榎本先生が言わ

れたように温厚であるし、小さいことは別にとがめもせんし、これでいいんやろうかと思う位ゆつくり落ち着いていたことを憶えています。昭和一二年に兵隊に出ましたが、その後も父となり親子みたいにしていただきました。とにかく柔和で、大きいですからちよつと人が見たら恐いように見られますが人の世話となると親身になつてなさいました。

◇ 榎本牧師

お証しの中にありましたように河本さんは本当に人の面倒をこまごま見る方で、そして寂しいことがお嫌いで、にぎやかな所が好きな方で、こういうにぎやかな集会をさぞ喜んでいられるだろうと思います。私共をたびたび誕生日に呼んでくださいますし、子供が大勢ですがみんなおいでとやるさがないで、ニコニコとよくしてくださいつたことを思い起します。

◇ 大口姉

河本さんが召される一ヶ月位前でしたか、主人がマツサージの注文を受けましたので初めて伺いまして治療させていただきましたが、やはりなんだか嚴かな感じがする方でしたがいざ身体に触れまして治療させていただきましたと、本当に幼な子のように素直に私達のまじい治療を受けてくださいました。信仰の篤い方ですから（普通の方ですとさつとかかりますが）河本さんの時は必ずお祈りさせていただきました。普通病人の方はいらいらする感じの方が多いのですが、河本さんは穏や

かに、ただちよつと疲れを休めるために休んでおられるような感じで、苦しみも訴えられず本当にどこまでも信仰をもつて静かに休んでおられました。いまま主人が着ております上下背広は形見としていただいたもので感謝しております。最初は大きすぎまして、大事にしまつておいたのですが、今は丁度合いますので日曜たんびに着させていただいております。

◇ 榎本牧師

エリヤの上着をエリシヤが捨て着てエリヤの後取りとなつたとありますが、大口さんは河本さんの洋服をいただいて今度は河本さんの信仰を継ぐようになっていただきたいと思います。

◇ 伊規須兄

個人的お交わりが何年間かあつたわけですが、私はヘブル書を読んで河本さんのことをいつも考えていました。さらに勝つた天のふるさとを望んでいる生涯、報いを望み見る生涯というのをいつも河本さんに結びつけて考えます。お葬式の時あの大きな会堂いづばいあふれるほどの方々が会葬されました、私共驚いたわけですが、随分いろんな方々とお仕事上でまた個人的につながりがありましたと思います。その中で神様一筋に歩いていらつしやつた。そして不言実行といえますか、本當にこの神様の恵みに感じて、天のふるさとを望んで、もつとも勝つた報いを得るといふ、そうゆう気持ちで従つていらつしやつたということを非常に教えられました。

恵みを施して千代に至るとありますけれど河本さんが忠実に神様に従つていらつしやつたことによつて、今もなおご家族の方々が神様の恵みの内に進んでおられる、まさに聖書のみ言葉がそのままここに現わされているような気がいたします。

一番印象に残つてゐるのは、早天祈禱会に毎朝出ていらして一番にお祈りなさる、あの祈りの声と言葉というものは今も忘れることができません。その他では、会堂の増築が何回かありましたとき、河本さんが委員長で私が会計としていろいろご一緒させていただきましたが、そういう中で不言実行そのまゝに着々となさいました。我を尊ぶものは我もこれを尊ぶとありますが、そういう感じの方であります。

◇ 榎本牧師

私共の目標はいつでも主からの報い、神様からほめられることにあります。今日の礼拝で教えられました「聖徒のために備えられた富と栄光のいかばかりなるかを知らんことを」(エペソ一)と、河本さんはその栄光を望んでこの地上を歩いていらつしやつた。だからどうかした時には随分いろんな非難と誤解を受けなされたこともあるけれども、ああゆう岩のような身体のようにどつしり構えて「なに、神様が知つておられるから」と主に対する姿勢をきちんとしていらつしやつた。この点を私共は学びとつていきたいと思ひます。私が八幡に参りました頃に漬物が統制になつて漬物有限会社ができ、その社長になられたとき、社長室のうしろの壁に大きく社の方針と書いて、まず神

を恐れ敬うこれが才一とあつた。私は本当に河本さんが詩篇一六篇にあるように「我エホバをわが前におけりエホバわが右にいませば動かされることなかるべし」と、あの戦時中物資が乏しくなつて仕事も困難になる、その中であつてビクとも恐れないでこれたのは、やはり普段から神様の前に姿勢を正してまず神様を恐れることを才一としている、才二は日曜日を安息日として休むこと、このことをちやんと社の方針として打ち出している。私はそれを見て神様がきつと恵んでくださるにちがいないと思つていました。河本さんもいろんな中を通りましたが絶えず主を前におき右においていましたことを思い出します。

◇ 前田 姉

皆さんおつしやいましたように本当にガンとして腰かけていらした後姿を思い浮かべます。ある時中央高校で父兄会がありました、その講堂でそれも父兄席でなくてPTAの会長さんらと同じ並びの席におられる河本さんを見つけて、教会の長老さんがPTAのお仕事をもしているのかとびつくりしたんです。

一番印象に残りますのは、召されてから納棺される時のお姿、それはもう昨日のように私の脳裡に刻まれ、本当に眠つているようなお姿で、なつかしい自分の身近な人のように浮かびます。そして不思議なことに召される前の日に、河本さんの悪いのを知りませんのに、何者かに引きつけられるように牧師館に來まして、奥さんから河本さんの容体が悪いと聞きびつくりしました。そし

て翌日お召されになつたのでした。河本さんのお葬式の時のことは忘れることができません。主にあつて召された方はこんなにもすばらしいものかと思ひました。私自身、河本さんが感謝して献げてくださいつた教会によつてどんなに多くの恵みを頂戴したかわかりません。河本さんの信仰を通して教えられましたから、これからも天国を目指し、愚痴を言わないで感謝をもつて信仰のあとを追わせていたゞきたいと思ひます。

◇ 榎本牧師

同じ幹に連なる小枝として、私は河本さんの一番お好きだつたみ言葉を思い起すんです。ヨハネ一五「我はまことのおぶどうの木、汝らはその枝なり、汝らもし我におり我汝らの内におらば多くの果を結ぶべし、汝ら我を離るれば何事も成し能わず」こゝを讚美しくり返しおつしやつた。

本当に主を離れては何もできない。そのかわり主に連なつてさえおれば主がなして下さる。これを本当に味わつて生涯を歩んでいらしたと思ひます。これは河本さんの大好きなみ言葉の一つだと思ひます。

◇ 高木 姉

私は二八年から亡くなるまでの河本さんしか知りませんけど、ゆりべもちよつと考えたくてですけど、一年の終りの感謝会するとき、河本さんがヨハネ一五章のみ言葉を通してお証しなさいました。

それ以来こゝを讀むたびに河本さんを思い起します。そして私も神様と連がつていこうと決心しましたがいろいろ失敗をした時には、私から離れてはあなたがたは何事もなしあたわないとみ言葉をお願いして、またそこで力が与えられて今日に至つています。それからもう一つ献堂記念の説教の時にヨシユア記一章のみ言葉をもつて右にも左にもそれないで歩まれたというのを聞きまして、私達も河本さんの足跡を踏んで右にも左にも曲らずに天国目指してゆきたいと願つています。

それからベンチの二番目に座りましたからお掃除の時は特別に椅子を普通より広く間をあけて並べたことをとてもなつかしく思われます。

◇ 榎本牧師

思い出は数多くて尽きませんが、私も晩年の河本さんのことで、河本さんがお倒れになつてかなり病状が進んでもうお召されになる近くだつたと思います、信生さん呼んで「何でも先生に相談しなさい、神様に従うように」と、これが河本さんの最後の遺言であつたんじゃないかと思ひます。神才一にしてほしい……ご自分の歩んだ生涯の結論を通して神様の豊かな祝福がなくては駄目なのだから神様才一にしてほしい。河本さんにしてみれば、学校を出てまだ事業に慣れていない信生さんを、河本さん自身としては親としていろんを不安をお持ちだつたと思ひます。けれども神様に結びつけて神様が支えてくださるから大丈夫だ、自分も支えられた、この神様にぜひ信頼してほしいと心をこめておつしやつた一言、河本さんはすばらしい遺産を残されたと思ひます。これは河

本さんを記念するたびに、私はなんとも言えない感謝と共に厳かさを感じます。

◇ 高木 兄

才一番目、礼拝はもちろん早天祈禱会あるいは祈禱会、伝道集会には必ず出席されそして時間をピツタリと厳守された。お祈りは必ず「み名とご宝血を崇めて感謝します」ということを言われまして私が今、「み名と御血潮を崇めます」といつているのは、その影響じやないかと思えます。献金のお祈りもその頃は河本さんが必ずやつておられたのを憶えています。

その次の思い出はお証し会でございますけど、河本さんは事業について神様に従つてかくなつたお祈りしてかくなつたというように具体的なお証しをよくなさいました。その頃には病気になるらまして、大分弱つて西郷隆盛を思わせるあの身体が細くなり、家族の方に支えられながら礼拝に出しておられました。そしてある時、帰りがけに信生さんがひよいと小脇にかかえましてね、タツタツタツと行きました。私はその時、石川啄木の歌を思い起したんです。「……母をしょいてそのあまりの軽きに……」この歌をひよつと思ひ出しましてね、あの大きなおじいちゃんがかんなにも軽くなつたのかと驚きました。

それから二月四日でしたけど、私、会社の帰りに気にかかつたのでお寄りしたところが、すでに召されておられました。それで今は亡き高橋さんが遺体まで案内してくださつて、顔にかかつた白い布を取つてくれました。そのお顔を拝見しましたが、本当にあんなに美しい顔を見たことがなかつ

たですね。クリスチャンの最後の死顔をその時初めて見ましたけれど、実に素晴らしいお顔でした。眠るがとき大往生とありますが、本当に死んだ人とは思えず「河本さん」と言えは目をパツパリと開けてアーメンといいそうな、穏やかな安らかな、神様にまかせきつた平安そのもののお顔でした。

それから今度は告別式ですけど、あの時の讃美歌「きよき岸辺に……」と「ものは変り世は移れど……」を歌いましたが、その時からこの讃美歌が私の愛歌となりました。そして河本さんの告別式を通して天国が非常に近いものになりました。これは信仰の体験であります。そして私は会社で仕事をしながらも讃美歌を歌うようになりました。伝道集会の司会の時も時々歌います。悲しいとかそんな感じは全然ありません。

最後にしめくりです。河本さんが恵に感じて会堂を献げられ、教会が建てられたことによつて私は二〇年前にこの教会に導き入れられ、福音にあづかりました。今日、福音が隠されているこの時代に、納福音に結びつけられたことは世の初めから選ばれ導かれたのだと、今日の説教を伺いながらしみじみと感じました。また河本さんは教会会員として信徒総代として先生を助けて陰になり日なたとなつて教会を背負つていらつしやいましたが、私も河本さんの足跡にならつて先生の伝道を力一杯陰にあつてお助けしたい、そして教会のために働く者となりたいと思います。主から与えられた使命を果し走り行きたいと思ひます。

◇ 野村 兄

私、河本さんとは昭和八年ごろからですから長年お付き合いさせていただきまして、いろんな思い出が沢山ございますが、一つだけ申し上げたいことはみ言葉に対して大変謙虚にそして忠実に従われたことです。たとい困難にあつても、どんな状態であつても人がとやかく言ひましても、とにかくみ言葉だけに従うという謙虚さといひますか、神様をどこまでも神様としてゆくあの姿勢だけは変りませんでした。「まず神の国と神の義とを求めよ、さらばこれらのものはみな添えて与えられるであろう」とあるマタイ伝の山上の垂訓が大変お好きで、これを実行してこられた。

河本さんは温厚で大変おつとりとしたやさしい方だつたと皆さんのお証しがありましたけれど一つの筋金を通しておられました。信仰の義人と申しましようか「義人は信仰によつて生くべし」とそのまゝずばりを歩んでゆかれた河本さんを忘れることができせん。どんな所でもはばかることなく祈り、委ねるといつたら全く委ねきつてびくともしない。ですからへブル書に「彼は神に喜ばれるものとあかしせられる」とあります、神様から喜ばれる信仰であつたと思ひます。

それで私も及ばずながら、そうゆう信仰をもたしていただき、そうゆう経験をつんでゆきたいと願つています。

◇ 榎本 牧師

あの忙しい河本さんが集会に来られた時はもう余裕しやくしやくとしていらつしやる。一度仕事

に出なさるとそれこそ戦場の勇士のように忙しい方なんです。仕事の場所から場所に移動する時が最高の安息の時だつたようで、私、一度ご一緒に汽車に乗つたことがあります。ひととおりの話がつみ黙りなすつたと思つたら目をつむつていらつしやる。どこまで行つたらよいのかこちらはわからないものですから駅の看板ばかり見てキヨロキヨロしているんですけど、ふと目をさまして今度は豊前長洲でしようとおつしやる、そのとおりなんです。見ているほうの私がわからないのに寝ている河本さんはチャント知つている。これは、まあ事業をする方の特徴じゃないかと思うんです。賀川先生があれだけ忙しい御用をしていらしたのですが、汽車の中でちよつと一〇分ほど寝るから頼むよと言われ、横になつてグーグー寝てしまふ、そして一〇分寝るとスーと起き上る。あれが健康保持の秘訣だそうです。それでなくてはとも生身の体をもつた人間がそんなに出来るもんじやない。どうぞ皆さん、その秘訣を河本さんから学びとつて、ちよつと暇があつたらテレビを切つてお休みになると一年長生きできるということを憶えていたゞきたいと思ひます。多分河本さんもこれをいろいろな中で学びとつたと思ひます。あの岩のようなどつしりした身体で、気持も悠揚迫らざる方ですけど、実に敏捷なところがあります。それもいろんなところで学びとつていらしたと思ひんです。ことに軍隊に入つてそれを学んだことだろうと思ひます。ある時、ご一緒に旅館に泊つたことがあります。そして部屋にいたら、さあ先生風呂に行こうとおつしやる、旅館にいたら真つ先に行かないと後から来た人がバタバタくるから先に風呂に入ることですよと秘訣を教へて下さいました。事業をなさる方だけあつて、人がのんびりしている間の空いたところを利用して

いらつしやる。神様の手にすべてをゆだねきつていつでもゆつたりとしておられますが、いつたんやるとなつたら本当に電光石火のような勢いで事を処理していらつしやる方だつたことを思い起します。

◇ 牧師夫人

私達の結婚の時だつたでしょう。六月に河本さんご夫妻が結納を持つてきてくださいます、その時初めて河本さんご夫妻にお目にかかりましてそれからずつといろいろお世話になりました。うちの子供達もご自分の子供のようにしていただきました。一番印象に残りますのは、み言葉ですね、ヨシユア記のところが大変お好きのようでした。それともう一つお祈りのときいつも「主の愛に落ち込んで……」と言つておられました。私は本当に主の愛の中から飛び出しやすいのですけど、全面的に神様の愛の中に落ち込んでいらした河本さんを思う時、このように神様の愛の中に全く落ち込んでゆく生涯でありたいと願います。

それから戦争が激しくなりました。それを私共は最初荷物だけ送つてと思つていたのですが、六月頃だつたでしょうかあまりひどくなる、子供としては足手まといになるからと主人だけを残し、あとは五島に行きますからと河本さんに申し上げたら、いつもはそうですかと賛成して下さるんですけど、あの時だけは淋しそうな顔をして「奥さん、五島は一番先に敵が上陸して来ますよ。先生一人だけおいといて離ればなれで死んだつてつまらんですよ。もう死ぬならみ

んな一緒に死にましよう」と言われるんです。それで私共も考え直しまして止まることにしました。そして戦災で焼けましたけれど、河本さんご一家と一緒に汽車道に逃げまして誰一人ケガもしないで守られ今日まで参りました。あの時、河本さんが「心を強くしかつ勇め、汝の行くところに汝の神、共にいませば……」(ヨシユア一)とあるみ言葉のとおり信仰をもつておられたと思います。

◇ 榎本牧師

あの時は本当に河本さんに申し訳ないと思いました。それはほかではないんですけど、他の方々が大変心配して下さつて、先生子供だけはなんとかよそに移しときなさい、そうでないと私共も安心できませんと言われまして「そうかなあ」と思つて疎開させようとしたんです。けれども河本さんはそれほど自分達と一緒に、生きるも死ぬるも共に主にあつて一つ幹に連なる枝として行こうとしておられたのだと思うと本当に申し訳なかつたと思います。

今日まで誰一人として戦災で欠けることなく来ることができました。やはり私共は共に苦しみに共に喜ぶということ、本当にお互いの距離を短かくすると思ひます。ただ良いことばかり並べてきれいごとでするんじやなくて、本当に互いに苦しみも悲しみも主の前にあつて共にこれを分けあつてゆくところに私達の命、永遠の命があふれてくるのではないかと思ひます。

◇ 坪内 姉

今日は偶然というのか二、三日前から河本さんが亡くなられた日だねと写真を見て言っていました、主人もしばらくだから行きたいと言いますから、そのつもりにしてみましたところ仕事の都合で来ることができませんでした。河本さんは信仰の篤い堂々とした方だったと思います。私が風邪をひいて榎本先生にお祈りしていただいた時、河本さんが「ゆだねたら治つてしまふよ」と言つてくださつたのを思い出します。

◇ 榎本 牧師

今、思い出の中にありましたように、ゆだねきつてまかせきつて……これが河本さんの信仰の秘訣だったと思います。私たちは自分でじたばたあせつてもがいたりしますが、まかせるといつたらもうみ言葉に全部をまかせて、手をはなして神様にゆだねる、そういういさぎよい信仰——それが河本さんにいつもありました。だから信仰に立つまでは戦いがあつても、み言葉に立つたら、もう神様がやつてくださる。結果がどうなつても神様にゆだねる————ここが私共に必要な決断のつけどころだと思ひます。

◇ 信 生 兄

生前の父は榎本先生を非常に尊敬していました。そして前田教会も神様の祝福と榎本先生の信仰

と祈りによつて築かれそして育つてまいつた教会です。その前田教会に対して父は榎本先生を通じて、非常に深い愛情を感じておつたようです。また教会のお一人お一人について何も知らないような顔をしておりましたが、あつちに座つておられる方はどうしているだろうと始終気にしておりました。今日は父を憶えて時間をさいて記念会を催して下さつたことについては父もさぞ喜んでゐることと心から感謝申し上げます。

私も常日頃、身近におるもんですから、無意識のうち感じておつたわけで、あれがどうだつたこれがどうだつたという記憶がございません。高校時代は運動をして、後半は受験勉強ということで、おやじは始終飛び歩いているというところで接触するひまもなく、もともと家庭ではあまりしゃべる男ではありません。顔を合せて話することもありませんでした。冗談を言うときには、とてつもない、あつけにとられるようなことがありました。

私が今になつて思ふのには、朝早い早天祈禱会、それから晩の伝道集会に出かける父の姿を見ておりますと、子供達が動物園につれていつてもらうような、あんな喜び勇んだ足取りも軽く飛び出してゆくんですね、私はその頃は——今も横着でございますけど、あんなに朝早くから起きてこの寒いのにご苦労さんだなあと思つてました。それからたまたま病氣をしたり、自分も苦しい時があつたんでしよう、そういう時にはイエスさまイエスさま アーメン……

残念に思ふのは多少父の立場も解つてきた年頃になつて、父との接触が少なかつたこと、それから信仰の問題についても深く話したことがなかつたことでございます。しかし話はしなくても子供

心に父の生活態度によつて、今頃になつて解つたような感じがします。だから物を言わないことが説得にならないのでもなく、物を言うことが必ずしも人を説得するものでも引きつけるものでもないことを知ります。

ただひたすら神様を信じて何でもアーメンこういうことを常日頃の起居振舞のすべてのことに結びつけてそのとおりにやるし、また全く委ねきつて前向きでございました。これが今頃解つたんではどうしようもないんですけど徐々に解つてきつゝあるような気がします。またそういうことが何をするにつけても、一つ一つの事柄について思い出され、今後深く強くされると思います。

今日は父が心から愛した榎本先生、それから前田教会の皆様によつて、こういう会合をもつていただき、それがまた新しい信仰の実を結ぶきつかけになると私は思います。そうゆうことについては何よりも父が喜ぶものと思えます。本当に今日は大切な時間を頂戴いたしましたありがとうございます。

◇ 榎本牧師

今、子供としてお父さんの思い出を話していただいたんですけれども、伺いながら私は非常に望を与えられました。といいますのは、お証しにあつたように、学生時代はお父さんと接触して信仰のことを聞く機会もなければ聞こうとも思わなかつたけれども、今、實際社会に出て責任をもつて生活してゆく時に、いろんな問題に直面して、お父さんが歩んでいらつしやつたその姿勢を通して、

子供ながらに見ていらした信生さんが、お父さんの信仰を思い出して、またそのように歩もうとしていらつしやる姿を見せていたといて、私も子供がおります、子供がなかなか言うことを聞きませぬ。なんとかかんとか言うています、けれどもやがて私が天国に行つた後では思い出してくれる時があるだろうと、その慰めと希望をここで新しく与えられたことを感謝いたします。だから皆さんもお子さんがたといどつちの道に向いていても大丈夫だと、ひとつ信仰をもつていただきたいと思ひます。それからもう一つ私が八幡に参りましたときに、河本さんが大正町の二階へ私を迎えてくださいます、その時におつしやつた言葉は「先生しつかり伝道してください、沢山の人を集めてください」とおつしやつたかと言うとそうでない。「先生どうぞここで主の前に祈つてください、北九州の魂のために祈つてください」とおつしやつた。私はそれを伺つて非常にうれしかつた。

多くの人は先生しつかり伝道してください。沢山の人に福音を伝えてください。そうゆうことだけをおつしやる方が多いのですが、河本さんはそれをおつしやらない。人数のことは何も言わない、神に祈つてください。それは多分河本さんの信仰だつたと思ひます。河本さん自身が神様に祈つて、神様に働いていたといて今日まで来た、だからこれから先も神様が働いてくださらなければ人の力では何もできないのだ、だから神様を動かす人になつてくださいという意味だつたと思ひます。その一言が私の三〇年間の八幡における御用の原動力となつて、今日も日々に日々に祈り、祈りがこうして皆さんを恵んでくださり、導いてくださつてると思ひます。ですからどうか私共もぜひ祈り深い生涯を送りたいと思ひます。河本さんが朝早くから祈り、絶えず生活の中で祈り、本当に

一歩あゆんで祈り、そうしてみ言葉に従つて右にも左にも曲ることなく、真直ぐに進んでいらした。その足跡にならつて私共も右にも左にも曲ることなく進んでゆきましよう。

もう一つ思い出しますのは、山口に参りました時に仕事の関係で食糧問屋に尋ねるから先生も一緒に行きませんかと言われるので一緒に参りました。そこでご主人と応接間で話す時、河本さんは商売のことはちよつぱりと話してあとは聖書を開いて、人は二人の主人に兼ね仕えること能わず、人は金と神とに兼ね仕えることができない、そこを開いてあなたは日曜日に教会にいらつしやい、店を閉めてでも教会にいらつしやい、これが貴方の祝福を受ける道です。それは自分がこういふうにして神様に従つてこうなつた、この神様は生きていらつしやるから大丈夫ですよ、これをしなかつたら貴方の一生涯は結局無駄になるのですと私が伝道しなければならぬところを、チャントご自分でみ言葉に従つて一歩も半歩も割引きなしにはつきりと話しているのを、私はそばでお祈りしながら聞いていて、これでこの家に対して河本さんが自分のなすべきことを全部果して、本当に足のチリをはらえとイエス様がおつしやつたそれほどに、大抵の人はまあ仕事の話をして時々余裕があつたら、まあちよつと信仰の話をするんですけれど、そうではなくて、時が良くて悪くてもその事だけを中心に話をしておられた。私はその姿を見て本当にみ言葉を宣べ伝えよと主のお言葉に真剣に従つていらしたなあと思い出します。

ですから、そういう先輩があるんだと心にとめて私共も先輩の後に続いて進んでゆきたいと思ひます。



大正4年8月



昭和15年11月5日

夫と共に ― その生涯の記

主にむかつて歌え、

主をほめりたえ、

そのすべてのくすしきみわざを語れ。

(詩篇第一〇五篇二節)

主人と結婚しましたのは大正四年八月で、当時、私はまだ満年令で十九才でした。

この結婚のいきさつについて少しお話しますと、その頃、主人は二十四才で兵隊から帰つてきて、主人の次兄がやつておりました門司の河本商店で働いていました。この河本商店は下関市内に居た私の義父、下川と同様に、味噌・醤油などの卸をしていました。河本の兄は兵隊帰りの弟(私の主人)と同じ店を一緒にやるつもりでいたようですが、主人は小さくてもいいからどうしても自分の店が持ちたいと云うことで、八幡に店を持つ準備をしていました。独立するには一人でいるわけにゆかず、結婚しなければなりません。そこで、丁度、お嫁さんを探していたわけです。

その頃の私はどうだつたかと申しますと、結婚するしばらく前に門司の岡部運送店と云う所で手伝いをしていましたが、大晦日の掛取りも終つて風呂に入つてゐる夜半、火事に会つと云うで

きごとがあり、しかも、とても寒い日でしたので、それが原因して肋膜炎を煩い、運送店から母の再婚先である下川の家へ帰っておりました。そこで療養かたがた弱い身体ではありましたが、お客にお茶を出したりなどの軽い家事仕事を手伝っていました。

下川と河本の兄とは同業者でしたし、その頃下川の父が味噌・醤油組合長をしていた関係で、ある日、組合の集会が下川の家でありました。その時、私も手伝つてお茶を出したりして接待しましたし、勿論、主人の兄も出席していました。恐らくこの会がきつかけになつて、下川に娘が一人いるけれど、弟にどうであろうか、と云うような話が出てきたものと思います。よくは存じませんが、何でもその頃、主人はお嫁さんを探しに長府の方へ出かけていたとも聞いております。とにかく、こう云う事が結婚への具体的な糸口だつたわけです。

しかしながら、当時、私は主人のことについて何も知りません。ただ、河本商店には御主人の弟さんが居られるそうだと云う程度のこと、殆んど知らなかつたと言つていいでしょう。

ところが、この結婚話にとても喜んで自分の貯金を全部出して賛成してくれたのが五つ違いの私の弟の節生でした。といひますのも、弟はまだ学校へ行つていましたが、学校から帰宅すれば早速下川の店の手伝いで配達にまわつていましたし、しかも、お互いに同業で競争相手だと云うことから、弟の節生は主人のことをよく知つていたわけです。ことに、弟は主人のことを「河本の弟は商売がうまい」と云つて認めていたようです。当時の話ですが、私達の仲人をしてくれた佐々木さんと云う小売店では、御主人と奥さんとがそれぞれ下川に、河本に、と好みがあつて、私

の弟が配達にすれば下川の味噌を上置き、主人が配達に来れば河本の味噌を上置きなどしていた、と云うようなこともあつたそうです。

こんなわけで、とにかく、この結婚の話には家族の者全てが「良い人だから」と云つて賛成してくれました。勿論當時のことですから、結婚までに交際なんてありません。けれども、私自身結婚をせせすに八幡あたりで店を出して、商売をやつてやろうと思つていた程に商売が好きでしたから、商売の上手な人である以上別に異存のあるはずはありません。でも、主人の方は私がどんな人物であろうかと、二・三度下川の店の前を道の反対側から見にきたことがあるそうですが、そんなことなど知りませんでした。同じ頃、私にも神戸屋と云う家から結婚の話があつたのですが、結局、河本に嫁ぐことになりました。

ここで、私の生い立ちと信仰についてお話ししますと、私の実父は岩佐作太郎と申しまして、父の里は菊川公に仕える指南番をしていた程の家柄だつたようです。父は次男でしたから明治大学の前身である明治法律専門学校を出て警察に勤めていました。それで、よくあちこちに転勤し、移住しましたが、山口県の萩に居る時代にカトリックのミリオン神父と云う方から父と母が洗礼を受けました。父は伝導者になるかと思つ程に熱心をクリスチャンだつたそうです。その父が仕事で台湾に行き、そこでマラリヤに罹りなかなか治らず、帰国後発病して療養のいかにもなく、岩国で亡くなりました。当時、私はまだ小学校の一年生位だつたと思います。家族は母の他に兄と姉、それに先にお話しした弟との五人でした。父の死後は母が裁縫の指導して、生計を立て、

子供達を育て、教育してくれたわけです。もつとも、母方の里は徳山でも一流の山中屋と云うか
なりの資産家でしたから、月々少しはたすけてくれましたし、兄と姉の二人を教育してもらいま
したが、それでも、その頃は貧乏でかなりつらい生活でした。殊に、父が病気で療養している間、
町から医者を連れてくるなどで、随分お金がかかりましたので、母が嫁入りの時に持つて来た着
物は全て質屋へ持つていくと云う状態でしたから、私の子供時代は貧乏の中で過したようなもの
です。父がサラリーマンで、死後、特に苦勞したものですから、それだけ一層、貧乏しないよう
にサラリーマンにはなりたくない、自分で商売をしたいと云う気持ちになつたものと思います。

その頃、徳山に住んでいましたが、下関に居た伯母が「そんな田舎にいても」と云つて、下関
に出て来るように勧めるものですから、私が一人で十二・三才の時下関へ出て、伯母の家に一年
程居まして、母はその後弟をつれて下関へ移り、やはり学校で裁縫を教えて生活していましたが、
母の老いた両親の希望もあり、伯母のすすめもあつて、母は下川家へ再婚したわけです。下川も
先妻と死別して娘を一人抱えて商売をしていました。下川の店は本店が三田尻にあつて、下関は
支店で義父は支店長と云うわけです。下川の父もやはり熱心なクリスチャンでも立派な人
物でしたから、私は父親が居ない淋しさなどを感じたことはありませんでした。

こう云うわけで、私が生まれた時すでに両親共クリスチャンでしたし、下川に行つてからもそ
うだつたわけですが、しかし、その当時、私自身の信仰は未だ幼稚なものでした。私が熱心なク
リスチャンの助産婦さんで岩本さんと云う人の養女に一時なつていた時、ある日、私が学校から

一緒に出かけたカゲ山神社に参拝したと云うことが知られて、その人からとてもきつく叱られたことがあります。偶像礼拝の良し悪しすら解らない状態でしたから、何故その人が立腹したのかわからず、逆に、私の方が腹をたてて下川へ戻つてしまつたことがあります。ですから、私の信仰はただ家の宗教がキリスト教であるという程度にすぎませんでした。今から考えますと、岩本さんと云う方はとてもしつかりしたクリスチャンだつたのだらうと思います。

そう云うわけで、義父も母も信者でしたし家庭の宗教はキリスト教だとなつていましたから、私達の結婚の時、主人の家は真宗でしたので、義父が「うちはキリスト教だがいいのか」と云つたところ、河本の兄は「宗教は自由だからかまわぬ」との返事だつたそうです。私自身も信仰がはつきりしていたわけではありませんから、結婚にあつて信仰上の困難はあまりなかつたようです。

そこで、結婚からそれ以後のことについてお話ししてみますと、私達の結婚式は佐々木さんと云う方の仲人によつて河本の店でしましたが、その時すでに、主人は八幡の中央区（現中央町）で商売を始めていました。河本は結婚してすぐに店を始める心づもりでいたのですが、私の方で母の病氣などがあつて予定していた時期より一ヶ月程遅くなり八月十三日に結婚しました。この結婚するまでの約一ヶ月程は主人とお父さんとの二人で八幡の店をやつていたので、ですから、新婚旅行などとのんびりしたことはできません。朝出て来て式が終ると翌日から八幡の店で着物の裾をからげて仕事を始めると云う状態でした。

店と申しましたが、当時、中央区で銀座通りと呼ばれた所でいろんな商店が立ち並ぶ通りに、間口三間半から四間近い大きな家を借りて始めたのですから、小売店と云うより最初から卸店でやっています。

こんな具合に、主人は何事にも大きくく／＼やる方でしたから、仕入れなども倉庫に入りきれない程に仕入れるのが好きだったようです。それでも最初から現金を持つていて始めるわけではありませんから、みな品物を門司の兄の店から借りて、河本商店の支店として開いたわけですが、あちこちの卸屋さんに本店時代の信用がありましたから、必要なだけ品物を出してくれました。その代り、一年間にその借りを返済しようとしたので、随分苦しい思いをしました。勿論、着物一枚作る余裕もありませんし、どうにも手形を払うお金に困つて時計を質屋へ持つて行かなければ、と云うような時もありましたが、幸い、下川の店も、又、河本の本店もありましたからそこまでせずに済みました。とにかく苦しい中を通りました。でも、どんなに苦しくても二人共商売をしようと云うことで一致してましたから、不平や不足を云うことはありません。そうやって、何とか一年で全部の借りを返えしてしまつたのです。その頃は漬物・味噌・醤油・酒・罐詰類等を扱っていました。店では主人が殆んど仕入れや配達に出歩いていましたから、私が小売りをしたり、すでに製造もやっていましたので、福神漬の茄子を切つたり、佃煮用の昆布を切つたり、味噌をすつたりしましたし、夜は、大根の浅漬を作る為に十二時・一時頃までかかつていました。こんなことですから二人では人手が足りませんので、主人の甥や高橋さんが一緒

に働いていました。店の人は多い時には五人位居たと思います。そう云う店の人の世話、家庭の仕事、店の小売りに製造の準備など全て私が引き受け、主人は専ら外を回っていましたから、今から思いますと並大抵の苦勞ではありませんでした。しかし、私は忙しいことはあまり苦になりませんので、忙しければ忙しい程喜んでいたものです。一方、主人は仕事であちこち出歩いています。よく旅行してましたから、家に居るのは月に十日程位でした。とにかく、簡単によく旅行する人でしたから、どんな所へもすぐに行つて戻つて来ると云うわけで、国内は勿論、満州・台湾・京城などへも行きましたし、行きたい所へは殆んど行つています。観光旅行に出かけても必ず何か仕事をしてくるような人でしたし、又、記憶力のいい人でしたから、行つた所の産物やいろんな事を覚えていました。その上勤勉で、時間をとつても大切にしていましたから、今日すべき事を明日に延ばすようなことはありませんでした。例えば、今日は一日遊びに出かける、それも朝五時に出発となると、四時から起きて帳簿をきちんと整理しておいて出かけるといつた具合でした。ですから、私も主人には店の仕事だけをしてもらつて、家庭の世話までさせたくないと思ひ、私が全てをやつていました。一度だけ大掃除の手伝いをしてもらつたくらいで、他の大掃除の時など子供たちをつれて下川の家へ遊びに行つてもらつたものでした。その代り、主人は家庭の事で不平を云つたり、文句をつけたりすることがありませんでした。その点私にとつてとても良い夫であつたと思ひます。私が掃除などしていますと、いつも「ええかげんにしとけ」と云つたものです。でも、よその家へ行つてそのお宅が少しでも汚れていると、帰宅

して「あそこはびつたれや」と云つていましたから、本来きれいな好きの方だつたのかもしれない。また、食事のことも、大根の煮物だろうが鯛の刺身だろうが小言を云つたことがありませんでした。

こんな風にして、店の仕事も順調に伸びて、戦争前には中央町の店の他に、大正町（現八幡駅東側付近）に倉庫を、昭和十二年に現在の前田町に工場と倉庫を持つようになつていました。

お正月の初荷の時などは大変なものでした。漬物の樽を六丁程積んだ馬車が旧八幡駅（春の町にあつた）から、店までならぶ程で、貨物で来るもの、船で来るものと次から次へとやつてきますし、仕事をしている人達は皆「河本商店」と染め抜いた法被を着て、「初荷」と書いた旗や日の丸を立てて、店に着くとお酒を出したりして、派手に賑わつたものでした。主人もこうした賑やかなことが好きでした。

だんだん店が発展していくと共に家族の方もふえて参りました。私が十九才で結婚して数年目だつたと思いますが、主人の兄夫妻が二人共関節炎にかかつて入院したことがあります。その時、まだ生後八ヶ月か十ヶ月位だつたと思いますが、この兄夫妻の子供で時春と云うのを引き取つてやりました。そして、結局、この子が十四・五才になるまで育てました。その間に、当時京城に居た私の姉夫妻が亡くなり、実を引き取ることになりました。あれは大正十三年の冬、丁度、私が二十八か九の時だつたと思いますが、大陸でひどい感冒が流行し、姉が危篤との知らせに私と母が出かけました。その時、「まさか」とは思いましたが、下川の父がひよつとすると大事に至る

かもしれないからと申しますので、トランクの底に喪服を用意して出かけました。病院へ行くと姉は死期を知っていたのか、ブドウ酒で別れをしようと言つてお別れをして、布団をかぶると静かに亡くなりました。それから一週間して姉の店（小間物店）の店員が同じ流感でなくなり、滞在していた私と母もやられて入院する仕末でした。しかも、店が亡くなつてから一週間後に姉の夫（義兄の一郎）がやはり流感で亡くなると云う悲惨な状態でした。義兄が亡くなる時には主人も来ていましたので、義兄は主人に「実はおつさんに頼んで大安心」と紙に書いて亡くなつたそうです。その時は私も母も入院中ですから、全く会うことができませんでした。姉夫妻は六人の子供を残しましたが、その中の「実」は私が京城に着くとすぐになつて離れませんでしたし、義兄の遺言もありましたので、私が「実」を引き取つて、あとの子供たちもそれぞれ兄弟が引き取つてくれました。「実」は身体が弱く誕生をすぎていましたが、満足に座することもできない程でした。

その後、私の弟の節生が昭和九年に結核の為に亡くなりました。この時、弟はまだ三十三才で結婚後三年程しかたつていませんでしたが、弟の子「信生」を私共が引き取つて育てることになりましたから、結局、多い時には三人の子供達がいたわけです。ですからとても賑やかでした。でも私の四人兄弟は兄が早くに亡くなつていきますから姉と弟の死によつて、私だけがこうして生き残ることになつたのです。

私共の結婚後の信仰生活は、前にお話しした様に、私自身、家の宗教が単にキリスト教だからと云う程度の信仰しかありませんでしたから、時折、中央町にあつた川瀬先生のルーテル教会の礼拝に出席することで満足していました。主人はそのことに少しも関心を示すこともありませんし、だからと云つて反対もしませんでした。主人の母が家に参りましても床の間に阿彌陀様の掛軸をかけて、御飯を上げては拝んでいましたが、私にはキリスト教徒だと知つてはいますので何も申しません。主人には「小太郎さんも拝みなさい」と云つていましたが、一向に主人は拝むこともありませんでした。母が帰る時にはその掛軸をぐるぐると丸めて持つて帰りました。ある時、私が「阿彌陀様を床の間にかけてもいいのですか」と尋ねますと、「ああ、神も仏も御一体じやけのオ」と云つていました。この点、優しい、いいおばあさんでしたから、幸いに私は姑の苦勞をしたことはありません。このように、私は唯習慣的に礼拝に行く、一方、主人は宗教などには全く無関心と云う状態でした。その後、私も新しく信仰に目覚め主人も救われることになるのですが、そのきっかけになつたのが折滝先生（福岡キリスト伝道館、今の大濠公園教会初代牧師）との出会いなのです。

昭和五・六年の事だと思ひます。私の弟（節生）が胸を悪くして寝ておりました。その頃、折滝先生は門司の鶴原さん宅で、家庭集会をやつておられました。「門司にお祈りをして病氣をなおす先生が来られるそうだ」と云うことを私の義弟の洋太が聞いてきて、兄さんの為に祈つてもらひ、と云つて、初めて折滝先生に下川へ来て頂きました。丁度その時、母がリニューマチを煩

つて、注射が悪かつたのか、足が曲らぬようになつていました。下川は二階住いで、母の足が悪かったので、お客さんの時など私が呼ばれてお茶の接待などをしていたので、この折滝先生に来て頂いた時私も行つていました。弟が祈つてもらい、母も一緒に祈つてもらひまして、そのあとで、家庭集会がありました。その集会中気分かぬうちに足のまがらなかつた母が正坐していたので、その場ですつかり癒やされていたのです。このような事を通して、私自身初めて神の力、神が全能者でいらつしやることに目覚めたのです。それまでの信仰は習慣的に家の宗教だからと云ふことにすぎませんでしたし、そう云う気持ちから教会に時折行つていたにすぎません。しかし、この事から後、はつきりと自覚して信仰生活を始めるようになり、門司までは遠いので八幡の高見町におられた城さんの家で、折滝先生が一ヶ月に一回木曜日に家庭集会をしておられましたので、そちらに出席するようになりました。主人はそれまで私の信仰に反対することはありませんでしたし、当時、門司でキリスト教のいろんな先生による集会がありましたので、そう云う会にも時には一緒に行きました。そうこうするうちに、主人もだんだん城さん宅の集会にしげしげと通うようになり、福岡のキリスト伝道館にも出かけるようになり、昭和七年に私と一緒に受洗してしまいました。私は覚えませんが、幼児洗礼は受けていたと思ひます。

この時から、主人は酒を飲むこともやめ、さらにその後、ある日東京から帰る途中で盲腸になり、下関から車で帰宅しすぐに寝込んだことがありましたが、それが快復すると、自分が飲まないものを売るわけにいかないと申しまして酒の販売をやめてしまいました。その当時、事情の

わからない人達は酒の販売をやめたことで河本さんは事業に失敗したのだと噂していましたが、戦争になるにつれて酒が統制品となつてしまいましたから、酒の販売を止めた事はとても良い結果になりました。

信仰生活の方は城さん宅での家庭集會や福岡の伝道館まで出かけていましたが、そのうち日曜日に家で集會をして頂くことになり、折滝先生、榎本先生、野村さんの三人で交替に来て頂きました。集會は前田町にある家の二階でやつていましたが、交替で先生方に来て頂くのも都合がわるいから、どなたか牧師さんを、と折滝先生に希望しましたら、「どなたがいいでしょうか」と云われたものですから、主人は「榎本先生をおくつて下さい」と云うことで、昭和十四年に榎本先生に来て頂き、大正町の倉庫の二階に二軒分の部屋を作り、そのうちの二つに住んでいただきました。もう一つには倉庫管理の為に従業員の木屋さんが住んでいただけです。それから終戦後まで大正町から前田町まで先生に通つていただき、家の二階で「キリスト伝道館」と看板を出して集會をしていましたが、戦争中でしたので来會者も少なく、ただ特高刑事がたびたびきたものです。その度に、先生は近くにおられませんので、私が応対に出たのもなつかしい思い出です。終戦後間もない頃、主人と話している時、「教会があつた方がいいなア」と云うことになり、それなら近い所に欲しいと思いましたが、土地がありませんので祈つておりました。そこへ現在の教会の土地を含めて、その附近一帯の土地を所有していた方が、戦争にいられた息子さんを除いて、一家全員防空壕で全滅され、残された息子さんが戦後復員され途方にくれておられて、そ

の方が土地を手離したいからと訪ねてこられ買うことになりました。そこで、現在の教会を建てたわけですが、戦後ですから材料がなくあちこち集めて作つたもので、あまりいい家ではありませんでしたが、将来建て増しできるようにと主人が周囲をあけて設計していましたので、その後何度か建て増しされて現在に至つてゐるわけです。しかし、教会の土地が息子の名義になつてゐましたので、主人が居なくなつて将来息子が貧乏して、自分の土地だからと云つて取り戻すようでは不幸だから、早く名義を変えておかねば、と云つていましたら、丁度、隣りに居た中川さん（現教会別館）が土地をわけてくれと云われたので、それと同時に教会の名義に変更したわけです。主人が生前にこれだけのことをしてくれましたので私は安心しました。

主人が病気で寝ている時、私が「子供たちはもう大学まで出たのだから、どうかして生活していくでしようから、あなたと二人で死ぬまで家も屋敷も皆売つて食べたらいいので、別に何も残すことはない。教会が残つただけが天国へのみやげだからね。」と主人に申しましたら、主人は「うんうん」と云つてうなずいていました。

こうして、教会の基を置くことができるようになったのも、考えてみますと、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（行十六章三十一節）との言葉のごとくに、父岩佐作太郎が自から献身しようかと思つて思つて程に信仰を持つてくれたことによるのではないかと思われまゝ。また、その結果私たちがこのような祝福にあづかることができたのだと思ひます。

付記

本文は昭和四十六年一月におこなわれた座談会の内容をまとめたものである。

「ぶどうの木」

河本小太郎の思い出

昭和五〇年九月一日発行 (非売品)

北九州市八幡区前田二丁目10-3

編集者 榎本利三郎

北九州市八幡区前田二丁目10-22

発行者 河本信生